“ K ” iller

YOHANE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
“Ｋ”ｉｌｌｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ７０９４Ｅ

【作者名】
ＹＯＨＡＮＥ

【あらすじ】
死神と称される暗殺者が拾ったモノ。赤い手に引かれたあの日から、少女の世界は変わった。悲運な運命をたどったのは、彼か少女か…。どちらもなのか。

赤い手（前書き）

人を殺すシーンがありますので、苦手な方はご注意を。

赤い手

鉄臭い香りにはもう慣れた。鼻孔を刺激するそれは安らぎすら運んでくる。
手はヌメついている。せっかくうまく仕留めたと思ったのに、死亡を確認しようとしゃがんだ瞬間に血が噴き出してくるなんて。
顔に付いた血を手袋で乱暴に拭うが、手袋自体が血に濡れていてただ汚れが伸びただけだった。だがあまり気にすることなく手袋を外すとそれをポケットにつっこんだ。

血の海が徐々に出来上がっていく広すぎる寝室。
感情が払拭されている顔がぼんやりと闇に浮かび、その闇に溶け込む情も感じさせない冷たい瞳で部屋の中を見渡す。そうして抜かりがないか確認した。

ベットから転がり落ちて、顔は苦しみに歪んでいる2人。なぜこんな目に遭ってしまったのかも分らぬうちにこの世を去った無念。
だがもしも殺される前に気づく間があったとしても、黒い長袖のTシャツに黒いズボン、それに手袋までが黒色に統一され、無表情な顔をした男を見ていたら死神と思っただろう。死期を悟る一瞬ができるだけだ。

苦悶の表情を浮かべる2人の胸は赤く染まっていて、その染みも未だに広がり続けている。
こんな状況も見慣れたものだ。
大体の人は何が起こったか理解する前に全てが終わってしまっているだろう。
下手に騒がれて人を呼ばれると面倒だし、いくらすぐ死ぬ相手だからといって顔を見られるのは好まない。

暗殺者は顔を安く晒してはならないと教えられてきた。
目の前ですでに事切れている2体を最後に一瞥してから踵を返した。
仕事は成して、用済みのこの場所はなるべく早く立ち去るに限る。
多量の血は毛の絨毯に染み込んで赤く染め、踏むとジュクっと乾いていない血が浮き上がった。

コードネーム“K”

組織につけられた記号。優秀と称される暗殺者。
本名は存在すらしていないし、名を付けられた事実があるのかすら分らない。
それくらい昔からもう一般的な生活はしていなかったようだ。あまり覚えていないが、殺しも幼いころからしていたような気がする。
初めは、相手を油断させるところからだったような…。

罪悪感に苛まれるとか、辛いとかそういう感情は湧いたことがない。
死の、命の価値を教わる前に手を染めてしまったから。誰もそれを彼に教えなかった。

「お兄さま、誰？」
か細い声に、Kは目を見開き反射的に振り返った。血の付いたナイフを背後に隠しながらも握りなおす。
そして、目に入ったものに思わず眉根を寄せて目を疑った。油断は禁物だと熟知しながらも肩の力が抜けてしまう。

そこにはいつの間にか、6歳くらいの少女が目を擦りながら立っていた。パジャマ姿で、眠たそうにぼんやり立っている。殺しに物音はほとんど立てていなかったので、きっとたまたまトイレに起きた

のかもしれない。自分にとっても少女にとっても運が悪いことこの上ない。

少女はKのことをぼーっと見ながら、小さく欠伸をしてまた目を擦った。

深夜3時であるのに子供が起きてくるなんて最悪だ。

いや、それ以前の問題は――

「…子供がいたのか…！？」

少女は質問の答え以外の返答に首を傾げ、Kは子供を睨みつけた。

眠気のせいで彼女はきょとんとしている。

あからさまに舌打って鋭くを吐いた。

整った顔を不機嫌そうにしかめ、依頼を思い出す。

殺しの依頼は【榊原夫妻の暗殺】だ。子供の殺しは含まれてはいない。

暗殺者として目撃者を生かしておくわけにはいかないが、こんな少女が害になるとは思えなかった。

目撃者を殺すのは情報を漏らされたりする可能性を消すためであるから、この少女がかけつけた警察に事細かく話をできる能力を有しているようには見えない。

それに、依頼以上の無駄な殺しは好むところではない。無駄な事はしない主義だ。

さらにこの少女のことは自前に目を通した榊原家のデータにはなかった。榊原氏の裏の仕事の事情から、可愛い愛娘を世間に晒すわけにはいかないから当たり前なのかもしれない。

加えて莫大な資産を所有しているらしいこの家を陥れようとする輩

は掃いて捨てるほどいるのだ。悪質な陰謀に利用されないとも考えられない。

さんざん悪事を働いておきながら、自分の血を引く子供は可愛いのか…。

その甘さには反吐が出る。

「なにかあるの？」

少女はKの後ろに倒れている何かを見ようと首をのばした。

「見るな…！」

つい怒鳴ってしまった。あまり大きな声ではなかったが鋭く制する声に、少女はびくっと肩を震わせて首を引っ込めた。

幸い部屋は暗くて近寄らなければソレが何なのかは判断できないだろうが、あまり興味を持たれては困る。

少女が一瞬泣いてしまうかとひやっとしたが、それには至らなかった。まぁ、鳴き声を上げられるくらいならそれを理由に始末してしまえるのだが。

だが、もう血でぐっしょりとした手袋はポケットの中で丸まっているし、首を絞めるのは証拠が残りやすいのでなるべくなら避けたいところだ。

Kは少女の前に立ちはだかりながら、半ば無理やり寝室から追い出し、自分も退室した。細い手首を血まみれの手で掴む。

拭い切れなかったぬるっとした感触に少女は気持ち悪そうに眉をしかめるが、大人しく手を引かれている。抵抗できないほどの力で引っ張っているからかもしれない。

「お前、名前は？」

苛立ちを抑え、Kは目的の物を探しながら暗い屋敷を電気も点けず

に徘徊する。Kの早歩きは少女には少し早すぎるようで小走りになっている。けれどそれに気付きながらも歩調を緩めることなく歩き続けた。
「あのね、わたし教えちゃいけないんだって！」
少し息を弾ませながら少女は言った。
「なんで」
「駄目って言われてるの」
「誰に？」
「それも駄目って…」
困惑して眉を下げる少女を見てKは大きくため息を吐く。いろいろな事を口止めされているらしく、簡単には状況は改善されそうにない。
そこでようやく目的の物を見つけ、足を止めた。
「なぜ？」
それでもやはり、一応聞いておこうと思う。
「危ないからって」
ふうんと頷き、眉を寄せながら少女を引っ張っていた手を離すと、受話器を上げた。これが探し回っていた物だ。
いったん会話を止め、少女に見えないよう注意しながらダイヤルを回す。
少女は眠気でほんのりと充血したつぶらな瞳で見上げているがそれを無視して私用を済ませようとした。

「コードネーム“K”」

決まりの言い出し。これを言わないと沈黙が流れるだけだ。
苛立ちを隠していないKの声に相手はククッと引きつった笑いを返してきた。
『どうした？失敗でもしたか？？』
「ふざけるな。何を間違えてもありえない。それに失敗したなら生

きているはずがないだろう」
お前等がそう教育したくせに分ったことを聞くな、と心中悪態を吐いた。
予想外な状況ではより冷静であることが求められるが、生命の窮地に立たされたのならいざ知らず、少女が湧いて出てきたこの状況は苛々すること他ならない。Kは眉間に縦じまをくっきりと刻んでいる。

『では何だ？何にそんなに苛立っているんだ？』
「……この家の家族構成は？」
質問に質問を重ねた。先に答えを返したのは電話の相手だ。自分の質問を無視されたことなど気にしていない様子だ。
『ターゲット夫妻だけだ。双方の両親は亡くなり、子供はない。家政婦の出入りはあるが、基本的に2人暮らしだな』
Kは目線を下げ、不安げに見上げている子供を見た。少女は何か言いたそうに訴えかけているが、大人しくKの様子を窺っている。
夫妻の面影があるかなどは分らないが、娘の可能性はかなり高い。危険だから名乗るなと言い付けていたことからもそう予想される。隠し子というやつか…。

「なら仕事は成した。報告はこの電話で済ませておく」
『お前が本部に顔を出さないのは珍しいな』
興味を滲ませている声を遮る様に受話器を置いた。電話の向こうではきっと口元を歪めているだろう。

名前？

Kは改めて少女と向き合った。何も分かっていない無垢な顔が苛立ちを誘う。

「名前、どうしても言えないのか？」

「駄目って…。怒られるもん」

困ったように少女は俯く。

両親に怒られた経験があるのか、それともきつく躾けられたのか、目を潤ませる。すぐ感情が表に出るのは分りやすいが、こうまではっきり困った顔をされるとこちらも困っているような気がしてくる。一度深呼吸をして気を治めてからもう一度聞いた。

「両親には言わない。俺にだけ教えてくれるか？」

極力優しく言った。けれど相変わらず眉間にしわが寄っているし、声も硬かったので、ただゆっくりと言葉を発したことにしかならなっていなかった。

「ほんとう？」

けれど少女は躊躇いがちにKを覗き込む。

「あぁ」

言う相手はもうこの世にはいない。死後の世界ですら、俺とあの夫婦が会うことは無いだろう。

世間一般には許されず、非人道的な事をしている自分を自嘲した。榊原も決して褒められる生き方をしたわけではないが、暗殺者ほどではない。殺した人の数も苦しめた人の数もKの方が圧倒的に勝っている。

少女は背伸びをして耳を貸すように促す。Kは仕方なく身を屈めてやった。

「あのね、アイラっていうの」

こっしょっと言った。
「アイラ？」
日本人には珍しい名前だ。声が大きかったのか、すかさずアイラはシーっと口の前で指を立てた。
「榊原、アイラ？」
まわりには誰もいないと知りつつも先程より声を抑えて確認した。
「うん」
名前を呼ばれて嬉しいのか、にっこりと彼女は頷いた。
それを眼の端で捉えながら確信しする。アイラは先刻殺した夫妻の娘に間違いない。
厄介なことだ。Kは盛大な溜息をついて眉間を押さえた。
ここでこの娘を殺すのは理念に反するが、姿を見られた以上生かしておくのはやはり危険かもしれない。
殺す理由も、殺さない理由もある。どちらを優先するか迷っている自分に困惑した。
裏の世界では一瞬の迷いでも命に関わると分っているのに。

「あの…お兄さまは？」
「何か？」
いろいろ考えていた時にそれを遮断され、思わずきつく聞き返してしまうと、アイラは口ごもりながら続けた。
「…お名前……」
あぁ、とKは頷く。
まだ名乗ってもいなかった。そう言えば何度か名前の事や怪我をしているのかと聞かれていたような気がするが、考えに集中していてすべて無視してしまっていた。

「俺に名前は……」
「？」
名前が無いなんておかしな話だ。自分が普通じゃない事を教えるよ

うなもの。
いくら小さくて閉鎖的な家で育ったアイラでさえそれくらいのことには気づくだろう。
「……、K…」
少し間を空けて考えた後、Kは口にした。名前と言われて浮かぶのは暗殺者としてのコードネームのみで仮名も咄嗟には浮かんでこなかった。
「け…？」
「K」
聞き取れなかったらしく、もう一度Kは言った。
「ケイお兄さまね！」
分ったと言わんばかりに笑顔を見せて、アイラは笑った。
“K”と“ケイ”では少し違う気もするが、そこは敢えて否定せずに別の指摘をすることにした。
「お兄さまは要らない…」
そんな紳士キャラではないし、落ち着かない。もっとも、少女からそう呼ばれる所以は無い。教養あってのこそだろうが、自分にそこまで気を回す必要はない。

「ケイ、はどうしてここにいるの？」
唐突な質問にKははっとする。最初にその質問を流したのでもう触れられることはないと思っていた。
少女の疑問は当然のものなのだが、もちろん正直に答える訳にもいかず、Kは押し黙った。
「ケイ？」
それを不思議そうに見つめてくる瞳は無垢。汚れを知らず、きっと大切に守られてきた証。
同じく裏社会の籠の中で育ってきたというのに、環境の違いではこうも何も知らずに生きてこられるのか。それは無知だと蔑みたくも幸せなことだと笑ってやりたくもなる。

両親が殺されたと知ったら、この瞳はどんな揺らぎを見せるだろうか？例外なく憎しみや悲しみに染まるのだろうか。
それを確かめるのも一興かもしれない。フっと笑みが漏れ、口の端が不敵に上がった。

「お前を、迎えに…」
「わたしを？」
「あぁ」
首をかしげて確認を取るアイラをKは何となく直視できないでいた。
嘘を吐くことへの後ろめたさと、自分が言った事への驚きが混乱を起こす。

「どこにいくの？いま？お父様とお母様は？」
「――今すぐ。俺と二人だ」
Kは少女の腕をとった。そしてアイラを真っすぐに見つめる。
「行先は知る必要はない」
冷たく暗い色の瞳に支配されて、アイラは何も言う事が出来なかった。ただ手を引かれるままについていった。
戸惑うアイラをよそにKは出口を目指す。
近くの窓から飛び降りてもよいが、それでもしアイラに叫ばれでもすれば暗殺の意味がなくなる。

Kの手にさっきまでの不快なぬめりは無い。その約半分はアイラの手首に付着して、今は乾いてカサっとしていて擦れる度にぱらぱらと落ちる。色も鮮やかな赤から赤紫に変色している。

彼女の一歩前を行くKの闇色の髪はわずかに靡いていて、自分の毛先の丸まった髪を見てそれが羨ましくなり触ってみたい衝動に駆られたが、今はKについていくことで精いっぱいだ。

足音は1人分。アイラの躓きそうな不規則な足音。
無音歩行に慣れているKにはとても耳障りな音でもあった。さらに浅く息を吐く音まで混じり始めている。
明らかに運動不足の幼い少女と訓練を受けている自分との体力の差は承知しているが、やはり思い通りに進まないとペースを乱されてしまう。
「…くそっ」
少女を引っ張る方の腕には重さがかかる。
自分の歩く速さについて来れていないアイラ。しかしそのペースもKにとっては充分ゆっくりな速度で、十分苛々させられている。これ以上たらたら歩くことなど考えられない。
仕方なくKはおろおろするアイラに構わず荷物のように横抱きにした。
「ケイ、怖いよ…」
びっくりして目を見開きながらアイラが身じろぐ。
「大人しくしてろ。落っこちるぞ」
Kがそう言うとアイラは動きを止めた。子供にしては聞き分けが良いのかもしれない。
好都合でもあるが、こう反抗がないのもやりにくい。癇に障る事をすればすぐにでも殴って大人しくさせるし、殺す理由にもなるのだが。
現状はどちらの理由もないので、不本意だがこのまま連れ去ることになりそうだ。
Kとアイラは人知れず榊原邸を後にした。
一生戻ることはないだろう我が家をアイラは振り返ることすらせずに連れ去られていく。
これからアイラが見る世界は決して穏やかなものばかりではない。

むしろ広いようで狭い世界のさらに影の差す部分に巣くうKが見せる世界は暗く厳しいものであることなど、不安交じりの期待を膨らませるアイラに知る由は無い。

流れゆく痕

連れてきたのはとある高層マンションの一室。
大きな窓から差し込むネオンの光で暗い部屋はぼんやりと明るい。
薄闇の中には殺風景な室内が浮かび上がっている。
部屋の電気を点けると、アイラは窓に飛びついていった。遠慮のなさに少しの苛立ちを覚えたが、特に咎める事もせずにKも室内へと入った。

こんなはずじゃなかったと後悔しながらも、血の付いた姿と幼い少女連れでは泊まれるホテルがあるはずもなく、観念して自宅に連れて帰った。やけくそな気持ちがあるのも確かだ。

「きれー！きれー！！」
アイラは明るい声を出すと興奮してかぴょんぴょん跳ねている。

大きな窓の外には都会のネオンが広がっていて、さまざまな電飾が夜の街をかざり、昼間とはまた別の明るさがある。
こんな時間に営業をし、街を賑わせる店はどんなものか知れているが、夜の闇はそれを隠し、輝きだけを美しく演出している。
ずっと人目に触れる事を許されずに過ごしてきた少女に、夜景は珍しいものらしく、下に広がる景色に負けず劣らずの輝きを顔に浮かべている。
釣られて見下ろす自分も、この夜景をゆっくり見たのは初めてかもしれない。だがすぐに紅いテールランプが飛び散る血飛沫と被り、眉を顰めると視線を逸らせた。
一瞬で気分を害されてしまった。

「もう寝ろ」

八つ当たりするようにアイラに言う。彼女はぱっと振り向いて懇願するようにKを見上げる。
「まだ眠くないもん」
拗ねたように見つめるアイラに、これだから子供は厄介だとあからさまに溜め息を吐いた。
両親以外の人間と交流し、この奇麗な夜景に心奪われたアイラの神経が高ぶっているのは分るが、時刻は子供が起きていられるような時間ではなく、体が睡眠を求めているのは安易に想像がついた。足はおぼつかなくなり始めているし、目だって半開きになり、さらにはさっきから欠伸ばかりしている。
「寝ろ。目を瞑れば嫌でも眠くなる」
「でも…」
名残惜しそうにアイラは視線を夜景に移した。一瞬一瞬で輝きを変える夜景はアイラの興味を捉えて離さないようだ。
「…明日も見れる」
呆れ気味にKがそう伝えると、アイラは後ろ髪を引かれる思いでたった一つのベットに潜った。冷えたベットに小さく身震いし、布団に絡まる。
電気を消してやると、部屋は外界からの明るさがぼんやりと入るだけの薄暗さに再び包まれた。
家具はベットとテーブルとソファーが1つしか置いておらず、生活臭のする部屋ではない。棚やテレビを置いたこともあったが、結局は邪魔になって捨ててしまった。欲しい時にはまた買えばいいだろうと安易に思った。

ソファーに身を沈め、もぞもぞと動く気配を感じながらもう一度外に目を向ける。忙しく走る車の喧騒も、必死で呼び込みをしているホストやキャバ嬢、酔っ払いの声もこの部屋には聞こえてはこない。その美しい片鱗だけがこの部屋への侵入を許されている。

数分もしないうちにアイラの規則的な寝息が聞こえてきた。いつもは静寂しか訪れないこの部屋には初めてのことだ。
それが耳障りなのか、居た堪れなくなって立ち上がると未だ自分の手が血で薄汚れていることに気づき、シャワールームへ向う。

勢いよく噴き出す熱いお湯が体を火照らせていき、薄赤く染まった水は足を伝って排水溝へと流れていく。
人を殺めた証拠でさえも簡単に消え去り、流れてしまう…。
あっけないものだと、Kは自虐的に笑いながら思った。

だがどうせならこの体についた傷痕も消えてくれればいいのに。鏡を見ながら無数に残るそれにお湯を当ててみた。
男だし、誰かに傷を見られて困る事もないのだが、ヘマをした証拠が残っているようでなんとなく嫌だった。まぁ、気を抜かないための戒めともいえばそうなるのだが。

何人かの女は勿体ないと嘆いていた。せっかくきれいな身体をしているのに、と。
事実、鍛えられて引き締まったKのボディーバランスは完璧で、モデルだって舌を巻くようなものだ。
長い手足に無駄のない筋肉は敏捷性を損なわず、けれど人を殺せるほどの力を備えた肢体。それに若々しさと生命力を感じて女を惹きつける。
それに加え、生まれ持った高い身体能力と、何より躊躇うことなく人を殺す決断を下せるその思考がKをこれまで生きながらえさせてきたと言っても過言ではない。
その体を滑るように流れていく水にはもう汚れは無かった。

シャワーを止めて粗方の水分をバスタオルで拭き取ると、ふと邸でアイラの手を掴んでいたことを思い出した。手を洗った様子はなか

ったからきっとまだ手首にはKの手の跡が付いているだろう。
あの細く白い手首にそれが残っているのは何となく不快で、Kは手ぬぐいを濡らしてベットへ歩み寄った。

アイラは小さく寝息を立てながら穏やかな顔つきをしている。Kが静か過ぎるくらいに近づいたせいか深い眠りに就いているせいか知らないが、彼が布団をめくっても全く反応を見せなかった。
「…んむー…」
手首にはやはり血痕が残っていて、湿ったタオルを押し当てると彼女は少し身じろいだ。
水ではなくお湯で湿らせるべきだったか…。
今更どうでもいいことを考えながら、Kはアイラが起きないことを確認して両手首を拭いてやった。
この血が両親のものだなんて、きっと考えもしていない安心しきった寝顔は何の夢を見ているのか時折微笑むように顔が動く。
それを無表情に一瞥してから、優しく布団をかけなおした。自分らしくない行動に首を傾げながらも、Kはソファーに深く身を沈めて目を閉じた。

＊・＊・＊・＊

アイラが目を覚ますと、陽の光がまぶしいくらいに差し込んでいた。
小鳥のさえずりも自分を起こす声も聞こえなかった事を不思議に思いながら目を擦ると、見慣れぬ男が自分を見ていた。
「ケイ…？」
ぼんやりしながらぽつりと口をついた。
「起きたか。飯は食べるか？」
昨日は薄闇の中でしかKの姿を見ることができなかった。この部屋

に来てからは夜景に夢中だったのと眠かったのとであまり記憶に残っていない。
窓から差し込む光に照らされたKの姿には違和感を感じる。
低めの声に、落ち着いた言動からもっと年上の、両親くらいの男だとアイラは予想していた。しかし実際はもっと若い。本当に「お兄さま」と呼んでも変ではない容姿をしている。
アイラはじっとKを見つめていると、Kはそれに気づいて眉を顰める。凝視されるのは苦手だ。

「何だ？腹は減っていないのか？」

引き結ばれた薄い唇がゆっくり開くと、困ったような声が漏れた。
確かにKは自分を見てくれているのに、その瞳は何も映していないかの様な無機質なもの。光さえも吸収し、闇に取り込まれてしまった瞳。
黒を纏うKは、この陽の光で溢れた室内ではすごく異質なものに見えた。黒髪は少し長めで、俯くと目もとが隠れてさらに影を落とす。
それは闇と光が相反するように――。

「…アイラ？」

街を歩けば間違いなく女性が振り向く顔をしかめ、虚空の瞳に気遣わしげな光がちらと覗く。
だが、まだ幼いアイラにその違和感を口にする言葉はまだ持っていなかった。言いたい言葉が出ずに、すごくもどかしい。困ったような顔だけを見せるアイラにKはなす術が無い。

「飯を食べるか、食べないかを聞いているんだが…？」

質問の意味が分らなかったのかと思い、もう一度聞いた。語気に苛立ちが含まれたのに気づくと、アイラは慌てて「食べる」と返事をした。
しかし、出されたのは朝食には相応しいとは到底思えないモノ。
「ケイ、これなーに？」
「…朝食だ。嫌いか？」

アイラは初めて見るそれを凝視した。食事の温かさどころか、食欲を誘う香りも漂わせてはいない。目の前には手のひらサイズの四角い袋があり、小さめの白いキャップがついている。
「食べたことない…」
とりあえず持ち上げてみるが、どうも食べ方がわからない。Kは無言でそれを奪い取ると、キャップを開けてアイラにそれを返した。
アイラはしばらく眺めてみたあと恐る恐る口に含み、中の物を吸ってみる。
「・・・」
ドロッとしたゼリー状のものが流れ込んできた。まずくはないが、食事とは到底思えなかった。すこし甘ったるい。
「ご飯がいい…」
「米がない」
あっさりと返した。炊飯器はおろか冷蔵庫すらこの部屋にはない。ガスコンロと流し台だけが使用形跡もなく存在しているだけだ。
「ケイはいつもこれなの？」
「あぁ」
食べない日もある。
「ご飯がいい…」
再度そう言われて、Kはため息をついた。無いと言っているのに。自分はこれでも十分だが少女にはそうではないらしく、普段は温かいご飯に栄養バランスを考えたおかずを食べていたことを思い出して仕方ないことかと諦める。

「明日は用意するから、今日はそれで我慢してくれ」
「はーい！」
再び口をつけ、しかめっ面をしながらゼリーを吸う少女に目を細めた。

そこでアイラが未だに寝巻きなのに気づき、Kは紙袋を手渡した。
「これなーに？」
「着替えだ」
アイラが起きる前に用意していた。ベットも適当なものを一つ買い、先ほど届けてもらった。
その間もずっとアイラは眠り続けていた。人の気配に敏感なKには考えられないことだった。
「一人で着れるのか？」
「できるよ！もう9歳だもん」
胸を張って威張る少女にKは無意識に笑いがこぼれた。自分が笑われたことに気づいていないアイラも、Kにつられて笑った。
「…9歳なのか？」
「うん」
6歳くらいに見えるのは、アイラが幼顔だからなのか、自分の基準が狂っているだけなのか…。だが確かに6歳にすればしっかりし過ぎているかもしれない。
「ケイは何歳なの？」
「…17くらい」

たぶんその位だと思う。組織に入って14年だと誰かが言っていたような気がする。誕生日を記憶していないので、その辺の感覚が麻痺している。
けれど自分がアイラの歳にはすでに人の命を奪っていたことは分る。今回のように暗殺をしに行くわけではなく、後始末といって止めを刺すだけの仕事だっり、子どもという立場を利用して相手を油断さ

せておいてそこを別の仲間が殺す。
殺しに関わることなのは今も昔も変わりない。
小さいくせに躊躇いがないと褒められたが、それは幼さゆえに何も分かっていなかったから。突き刺した刃が消す何かを。今でも分っているとは言い難いが。

アイラは与えられた服に嬉々としながら着替えている。ぎこちない手つきに手を貸したくなるが、一人でできると言ったアイラを尊重して見守るに止める。たどたどしい様子を見ているのはどうも不安になる。
「ケイ！可愛い？可愛い？」
ぴょんぴょんと跳ねたかと思うと、クルリと回ってみせた。適当に選んだ服だが、サイズは間違ってはいないらしい。薄ピンクのワンピースの裾が少し舞い上がる。優雅さは無いが、幼さと笑顔が可愛らしさを演出している。
「似合う？」
「あぁ」
こう言う何と言っていいか分からずにただ頷いた。しかしそれだけではアイラには不服らしくプゥと頬を膨らませた。
「ちゃんと言って！」
「……可愛い…」
少女を褒めるその言葉を言うのにはすごく気恥しいものがあった。あまり感じることのない感情にKは戸惑いながらも何とか口にしたのだ。
アイラは満足げに微笑んでまたくるっと回った。

後悔の重み

部屋の中をはしゃぎ回るアイラに目をやると、Kは立ち上がり玄関を開けた。するとそれに気づいたアイラも急に玄関に走った。

「どこか行くの！？」

「外に」

「私も行きたい！」

「駄目だ」

これから行くところにアイラを連れていくわけにはいかない。固定電話の代わりに置いてある携帯が組織からの呼び出しを告げていた。本部にアイラを連れていく事は無理だし、組織の周りは物騒で少女一人を置いておける環境でもない。

何より裏社会の、しかも自分を知っている人間にアイラと一緒にいるところを見られては双方の為にはならない。

「お外に出ちゃダメなの？」

寂しげな表情を見せる。昨日の奇麗な夜景を作り出した世界を訪れてみたいと思うのは、好奇心旺盛な子供には当たり前の欲求だろう。

「あぁ」

顔を曇らせたアイラを見て悪い事をしたと感じたが、許可を出す訳にはいかない。

とりあえず生かしておくことに決めた少女をみすみす危険にさらすような真似をするほど馬鹿ではないし、優しくはない。

「…独りにするの？」

アイラがぽつりと漏らしたそのひと言に、Kは胸に刺さる痛みを覚えた。ドクンと心臓が震え、逃げたい気持にも駆られた。けれど手をきつく握りしめ、なんとかその場に留まってアイラを見つめる。

「独りは寂しいよ…」

アイラはなおも足元に向かって呟く。か細く泣きそうに震える声はKの耳朶を打ち、頭の中で反芻された。

たった独り、物寂しい部屋に軟禁状態にされ、これまでの9年間のほとんどを過してきた。絵本もアニメもぬいぐるみもクレヨンもあったし、新しい玩具も与えられた。

けれどどんなにたくさんの玩具に囲まれていても、いつも独り。呼びかけて返ってくる声はめったにない。たまに思い出したように顔を出してくれる両親は優しくて大好きだけれど、一緒にいてくれない間はすごく寂しかった。

いつも忙しそうで、でもわがままを言うと両親が困っているのがあからさまに分ってしまって何も言えなくなってしまった。

そばにいて、さびしい。そう口にできなくなってしまってからもうずいぶん経った気がする。

アイラは顔をあげると、そこには底深い瞳を動揺に揺らしつつも微動だにしないKがいた。何かに追い詰められているような、そんな緊張感すら感じられる。

この少女の両親は昨夜殺した。肉親であり心の拠り所でもあった2人を殺してしまった。忘れていたわけではないが、改めてその事実を突きつけられると言葉が出なかった。

アイラはKが両親を殺し、もう存在しないという事実を知らない。だからこそ、アイラの言葉は堪えた。

突然アイラの存在が怖くなって、それから解放されるためならいっそ殺してしまってもいいかもしれないという考えも頭を過ぎったが、軽く頭を振って冷静さを取り戻そうとする。

涙目になってKを引き留めようとするアイラの瞳が無意識に自分を責めている。

「……ごめん…」

初めて、謝罪の言葉を口にした。
小さすぎてアイラには届かなかったかもしれないが、確かに発せられた。
アイラに対しすごく申し訳ない気持ちになり、急に胸が重くなっていく感覚かする。本当に逃げ出してしまいたかったが、身体は苛立つほど重く言う事を聞かなかった。

あの殺しが間違いだとは思わない。けれど、殺さなければよかったと後悔している。
間違ったことをしていないのなら、何故こんなに胸の詰まる想いをしなければならないのだろうか。今までこんな気持ちになったことなんてないのに。

アイラくらいの…否、それよりもっと幼い子を両親の前で殺したことがあった。
必死で命乞いをする両親には目もくれず、一突きでぬくもりを失くした幼子は糸の切れた人形のように崩れ落ちた。
絶望に目を見開いて言葉を失う父親と、ヒステリックな悲鳴を上げたあとに気を失った母親を見ても、Kが冷え切った表情を崩すことはなかった。
黒装束に眉ひとつ歪めず無慈悲に手を下し颯爽と立ち去るその姿は、

さながら死神。

別になんてことはなかった。
教えられたままに、命じられるままに、行動しているのだから。それが絶対の道として考えてきた。

アイラにおいても例外ではなく、命じられればきっと――。

凍てついた眼でアイラを見下ろすと、アイラは笑顔で見上げているところだった。
「ケイ、やっぱりちゃんとお留守番する！いい子にしてる！」
急に慌てたように言うアイラ。ぴょんっと飛び跳ねて手をKの顔に触れるように上に伸ばしたが、身長の差で首元までしか届かなかった。

今辛そうな顔をしているのはアイラではない。
きつく眉を寄せ苦しげに顔を歪めるKにアイラは気遣わしげにKの手を握る。それに一瞬震え手を引こうとしたが、小さく柔らかい手に力を抜いた。

「ケイ、泣かないで…ごめんなさい。ケイ…」
「泣く？…俺が？？」
愕然として目元に掴まれていない方の手を当てるが、涙は零れてはいないし湿り気もない。でも目頭が熱くなり、息が詰まりそうだった。鼓動もやけに大きくて胸を圧迫している。
普通な状態でないが病気でもない。こんな時の対処法など教えられていなかった。

本気で心配そうに見上げてくるアイラの頭に手を置いき撫でた。やわらかな感触の毛が指に絡まる。

口元が緩みかかった瞬間――不意に自分の手が赤く染まっている錯覚に襲われ、手を離した。

でもそれは錯覚なんかじゃない。
事実、この手は赤く血に塗れている。幾人もの血に塗れ、シャワーなんかじゃ流しきれないものが纏わりついている。
断末魔の悲鳴も血の気が失せ歪んだまま硬直した顔も、精神的攻めにはならないが鮮明に思い出す事が出来る。そして殺人に狂ったわけではないが、仕事を為した時に感じる高揚感も。

「？」
急な行動にアイラは驚き目をしばたいている。
Kは自分の手を見つめ、ぎゅっと握った。アイラに掴まれていた手もさりげなく振りほどく。
幻覚だろうが何だろうが、Kが自分の過去を思い出し気を引き締めるには十分な一瞬だった。

「絶対に部屋から出るな」
冷たく言い放った。瞳も暗く蔭る。そこには死神と称される紛れもない暗殺者がいた。
「ケイっ…！？」
急変したKに戸惑うアイラを無表情に一瞥し、心配そうな声を背中に受けながらKは玄関に鍵を閉めて出て行った。

１５階の部屋から気分を紛らわすために非常階段で１階まで駆け降りる。勢いをつけて降りていると言うのに、不気味なくらい足音はしなかった。風のように走ると評されれば聞こえはいいが、実際は

カマイタチのように鋭利的で、人を殺すために身につけたものだ。
爽やかな風が髪を靡かせるのと同じように、Kはナイフを閃かせてきた。
Kは本日2度目の自虐的な笑みを浮かべた。

今まで何人をもこの手にかけ、屠ってきた。復讐を大義名分に、必死に居場所を掴んだのだろうか、直接殺しに来た者もいた。彼らはは邪魔者として迷うことなく排除した。力無い者はただ泣きながら恨み事を吐き、自分の弱さとKの残酷さを呪う言葉を声が枯れるまで叫び続けた。それは相手にする価値もなく、無視して捨て置いた。

その時の呪詛や人々の恨みが今頃効いてきたのかもしらない。それともただ単に調子が悪いだけなのだろうか？
どちらにしろ、この手は血で汚れていて、その穢れが今を作り上げている事実は変わらない。

それを再確認しているだけだ。

＊・＊・＊・＊

『K、お前にやってほしいことがあるんだが』

スピーカーから聞こえてくる声はいつも同じで、この前電話に出た人物と同じ人物だ。
窓の無い小部屋には小さなスピーカーと今は何も映していないスクリーンしかなく殺伐とした雰囲気がある。

「内容は？」

自分ができる事は“殺し”しかない。命じられることも“殺し”だけ。変わるのはターゲットと稀に方法に注文がつくくらいだ。
それは相手も承知しているはずなのに、わざと言葉を切ってKの反応に何を期待しているのか間を作る。返す反応もいつも同じだと知っているのに、暇なやつだと思う。

今日はアイラを1人家に残してきたことが妙に頭にチラついて、無駄な対応に少しいらっとした。
不機嫌そうに眉を寄せると、スピーカーからはやっと返事が来た。
『なぁに、面倒な仕事じゃない。2人ほど消して欲しい人間がいるだけだ』
くくっと喉で笑う声を聞きながら、Kは黙って次の言葉を待つ。
『組織に歯向う奴でねぇ。佐々木と三田だ。分るか？』
聞き覚えのある名で、自分も何度か姿を目にしたことがあり顔はすぐに思い浮かんだ。あまり好印象を持ってはいない。

「…幹部だろ」
『あぁ、幹部だ』
声はあっさりと肯定した。
『しかし反逆者でもある。いや、お前はそんな事は気にせずに事を成せばいい。2人は一緒にいる。所在は…』

暗殺を成し遂げるのに不必要な情報は相手に教えないし、Kも聞かない。理由も背景も人々の思惑も関係ない。命じられれば、それが殺す理由になるのだから。

淡々と告げるこの声は、時に非情な命令でさえ平然とKに伝えてきた。まるで自分は全く関係ない、または興味がないとでも言うかの

ように命じる。
Kには拒否することも、失敗することも許されない。ただターゲットを殺すだけ。
ただそれだけが生きる道で、生きることを許された道。

突如スクリーンに地図が現れた。薄暗い部屋に急に光源が現れ、一瞬目を顰める。
そこに映し出されているのが身近な土地であることはすぐに分ったが、そこが先刻後にしたばかりの自分の住まうマンションだと気づいた時は整った眉を寄せ眉間にしわを作った。
7階に2人は居を構えているらしく、15階に住むKと会うことはなかったしKも知らなかった。だからといって気付かなかったのは抜けていたとしか言いようがない。身辺情報管理の甘さだ。

『質問は？』
「1つ」
『…何だ？』
普段質問をすることが無いKに、形式上で問うただけの声には驚きと好奇心が混じっている。
「俺の前回の榊原家…それの、親類縁者を探してほしい」
『もう終わったことじゃないか。まさか、今更失敗して取り逃がしたなんて言うつもりか？血迷って殺しに行くつもりなら教えることはできないな』

街のでふと目に付いた電気店のテレビでは昨夜の事件が流れていた。何者かに胸を一突きにされ殺害された榊原夫婦。警察は全力をあげて犯人捜索に当たると同時に榊原氏の人間関係についても洗っていくと報じられていた。
「仕事以外の殺しをするつもりはない。夫妻は確かに殺したし、確認済みだ」

それは昨日も言っただろ、と心の中で付け加える。
『なら、個人的なことだと言うのか？お前が』
窺うような厳しい声に、Kは無言でスピーカーに視線をやった。どこかに仕掛けられている小型カメラから、真意を見透かそうとする鋭い視線を感じる。

やがて間があってから声が響いた。
『…図星だな。基本的に、個人的なことに組織の力は使えないのはお前も知ってるだろ？……だけど、お前は今までかなり組織の役に立っている。それに、お前がお願いをするなんて珍しいじゃないか』
厳しさが抜け途端に面白がっているようなものに変わった。Kが不快感を露わにして顔をしかめても、忍び笑いはスピーカーから漏れ、部屋全体に響いている。
『いいだろう。今回お前が殺り終えるまでには調べといてやる。成功の報告を受け次第、教えてやるよ。それでいいだろ』
「あぁ」
浅く頷いて、Kはもう用は無いと言わんばかりにその部屋を後にした。

笑顔

エレベーターで7階まであがり、佐々木と三田の住む７０９号室の位置を確認した。非常階段に近く、両隣には一般人の住人がいるらしく子供の声が聞こえてくる。しかし７０９号室の２人は外出中なのか、物音ひとつしなければ気配もない。

ただフラフラと部屋の前を徘徊して帰るのでは不審なので、適当な部屋のベルを押す。人の気配がしないその部屋の住人はやはり留守にしていた。

いかにも会えなくて残念だったという様子を装って溜め息をつくと、Kは何事も無かったかのようにエレベーターに乗り、今度は１３階まで上がるとそこからは非常階段を使い自室のある階まで登った。足取りを紛らわすためのちょっとした工夫だ。

開錠して玄関を開けると、すぐに奥からパタパタと小さい足音が近寄ってきて、満面の笑顔でKに飛びついた。お腹と腰の辺りに衝撃があり、Kは慌ててアイラを抱き止める。後ろに一歩だけよろけたが、体勢を持ち直すと後ろ手に玄関を閉めた。

「おかえりなさいっ！」

腰の後に纏わりつき、動きが取れない。顔が見えなくてもその声は明るくて、彼女はにこにこと笑っているのが分った。出かける前の気まずさを思い出し苦笑にも似た息を漏らしたが、口元が綻んだ。

「アイラ、放せ…」

それから抱きとめた際に背中に回した腕を下ろし、静かに言った。しかしアイラは首を横に振ると、力強くKにしがみ付く。引き剥がすことは容易だが、触れる温もりは不快ではなく、わざわざ離そう

とは思わなかった。諦めたように立ち尽くして彼女の反応を待った。
「アイラ、ちゃんとお留守番できたよ！」
ぱっと顔を上げ笑顔で報告するアイラに、Kはいつも通りの無機質な目を向けた。この笑顔と澄み切った大きな瞳は何故だか調子を狂わせるようで、普段通りを維持するのに一苦労だ。

いくら子供だからとはいえ両親を殺された子、いつ事実を知って殺しにかかってくるか知れないから油断してはならない。
ひしひしと感じるアイラの好意が、いつ何の切っ掛けで悲しみと絶望の混じった殺意へと転換するか分らない。

そう自分に言い聞かせないとどうにも心のざわめきは収まらなかった。
純粋な好意にさえも警戒を払わなくてはいけない自分はやはりアイラとは生きる道が違うのだと思い知らされ、無表情にさらに影を落とした。
「そうか…」
アイラはきっと褒めて欲しいのだろうが、どんな言葉を言うか悩んでいるうちにタイミングを逃してしまって結局そっけない相槌だけを返した。
それを気にする様子もなく、アイラは遠慮がちに口を開く。
「だからね、ケイ、アイラお家にお人形さん忘れてきちゃったの…」
「人形？」
「クマさん…。お友達なの。取りに行っちゃダメ？」

人形が友達などと言う言葉はKには到底理解できないものだが、大切にしている物らしいことは伝わった。
しゅんとしながら、上目遣いでアイラはKを見つめている。
下がり気味の眉と大きな瞳に覗きこまれると、「無理だ」とは即答

できなかった。人形くらい諦めろと言うのも躊躇われる。

けれど、あそこにはもう戻れない。

トップニュースになっている榊原夫妻の殺害事件現場のあの邸は警察とマスコミでごった返している。

そこにアイラを連れて行って何か好からぬ事を口走られでもしたら面倒なことになりかねない。それかそ夫妻が殺されたことを知り、いくらアイラでもあの夜突如と現れた不審者であるKを疑うだろう。全国ネットで顔を晒されれば逃げ切れないアイラ質問攻めに遭い、榊原夫妻の隠し子だということもバレ、そうなるとKの事も芋づる式に知られてしまう。

これは何としても避けたいことだった。

裏社会では情報こそが重要で、いかにそれを隠し、逆に相手の情報は盗み取るか。それが命運を分けると言っても過言ではない。

些細な情報だとて寄せ集めることによって重大な事実を炙りだすこともある。

しかし自分が無理やりアイラをここまで引っ張って来た手前、このまま何も言わずに人形(クマだからぬいぐるみだろう)を諦めろとお願いを無碍(むげ)にすることもやはりできなかった。

悶々と考えた結果、やっとのことで口を開いた。

「買いに行くか？その…お友達、を……」

彼にしては、かなり頑張った言葉だ。眉間には縦皺が刻まれていて、苦虫を噛んだような顔をしている。なんだかすごく気恥しい。

友達を買いに行くなんて表現は良くないとは思うし、けれどその友達とやらはぬいぐるみだからそう言うしかなかった。ただ単にぬいぐるみを買いに行くと言えばよかったなんて事は思いつかなかった

のだ。

「お友達を？クマさん？」

心持ち明るくなった声。まずい表現を気にも留めていないようで、Kは内心ほっとした。

「クマでもネズミでも。好きなのを選べばいい」

幸い金は腐るほど余っている。実際、腐ったものだ。使うことに抵抗はない。

人を殺す度に振り込まれる金は貯まりに貯まり、普通の１７歳が到底持てる額でもないし、その辺のサラリーマンは一生手にすることのない額になっているだろう。滅多に通帳を開かないからその辺は詳しく把握していないが。

食費と生活費、あとは怪我をした時の治療代でたまにいくらか引かれているようだが、派手に金を使う機会がないのでどうしても溜まってしまう。

仲間内の散財するタイプの奴はブランドで身を固め、さらに女を数人侍らせても金に余りがあるようだから、Kは土地つきの家でも建てられるだろう。

なんとなく気持ちが暗く落ちていく中、アイラの笑顔と嬉しそうな声がそれを打ち消してくれた。

「お買いものいくの！？アイラもいっていいの？？」

驚きと喜びの混じった顔はきらきらと輝いている。Kは静かに頷くと、アイラは手をパチンと叩いて、きゅっとKに抱きつく腕に力を込めた。

「わぁい！ありがとう、ケイ！！」

「…あぁ」

どうしてこうも笑うことができるのか？見ているだけで気持ちが晴

れる。
どこにでもいるようで、今まで一度も出会ったことのない少女に良くも悪くも振り回されている自分は、数日前の自分が見たら驚くことこの上ないだろう。
冷たい平静を揺るがすものなど自分には在りはしないと信じていたのだから。

普段動くことのない頬の筋肉が持ち上がることに違和感を感じつつも、Kは笑むことを止められず、赤い手の幻影には目を瞑りアイラの頭を撫でた。
柔らかい髪が手に心地よい。アイラも首を縮めながら嬉しそうにに笑っている。

「もう行けるか？」
「うん！」
帰宅したばかりの部屋を後に、Kはアイラを連れ出した。
自然に握られた手に驚き、しかしゆっくりと優しく小さな手を包んだ。半分ほどしかない小さな白い手は、柔らかくて子供特有の温もりがあった。

罪悪感や後ろめたい気持ちが無いわけではないが、ただ小さな手の温かさだけに集中した。手を握られた記憶はないし、手がこんなに温かく柔らかいモノだとは知らなかった。
自分にもこんな手を持っていた時期があったのだろうか？
今はもうこんなにも罪に塗れた手を持つ自分にも、穢れなき頃はあったのだろうか…？
忘れられた遠い昔に思いを馳せたが、浮かぶ記憶は闇だった。

＊・＊・＊・＊

「ケイっ！あれなぁに？？」
「…どれだ？」
アイカははしゃぎながら指を斜め上に挙げている。指し示す曖昧な方向に目を向けるが、一体何を指しているのか分らなかった。センスのない店かショーケースかまたはあの独特な服装のことか…。
アイラは軽く足を止め、目を凝らしてどう説明しようか悩んでいる。
「うんとね、あの赤く光ってるやつ」
「…信号機」
こんな物も見たことが無かったのかと、眉をしかめたのも何回目か。それでも引っ切り無しの質問にめげずに１つ１つ丁寧に答えてあげるとさらに嬉しそうな顔をした。
「しんごーき？」
「車が走る目印だ」
きょとんとした瞳で改めて問われると的確な答えが浮かばず、当たらずとも遠からずの答えを返すことも多い。何よりＫも世間一般の事に詳しいわけではなく、必要最低限のことしか知らないが、街で目につく大方の物に対しては答えられそうで良かった。
数秒後に赤から青に変わった信号を見て、アイラが歓声をあげまた疑問をぶつけたことは言うまでもない。

マンションからしばらく歩いたところにおもちゃ屋がある。
アイラは初めて見るおもちゃだらけの世界に目を輝かせていた。Ｋももちろんこんな店に入ったことは無く、しかめっ面で辺りを見回す。
あまり楽しめそうにない雰囲気だ。
楽しげな音楽が店に流れ、親子連れが目立った。あれ買って、これ買ってとせがむ子供を両親がやれやれといった様子で宥める微笑ま

しいシーン。
Kはそれから目を逸らすと、他の子と同じようにKの腕を引っ張り「早く、早く！」と急かすアイラに促され足を進めた。
アイラは唐突に足を止めると、物珍しそうにおもちゃを手に取った。いつの間にか放されてしまった手を物寂しいと感じ、その感情を慌てて否定した。
仕方なく、迷子にさせない為に握っていた手が離れて心配になっただけだ。それか、手が冷えるのを無意識に嫌がったかのどちらかに違いない。
頭に浮かんできたごちゃごちゃまとまらない考えを消し去った。
おもちゃを手にとって凝視しているアイラに「買うか？」と問うと、彼女は逡巡したのちに首を横に振った。
遠慮はいらないのに、余計なものは買わないように教育されているようだ。
そんなこんなで目的のぬいぐるみコーナーに着くまでには長くかかったような気がする。
「かわい～！」
ふわふわとしたぬいぐるみが棚に所狭しと置いてある。
天井まで届く棚が両側にあり、Kはかえって買いにくいだろと冷静に分析すると同時にそこにいるだけで咳き込みそうだった。
彼にすればどれも似たり寄ったりで、よくもこんなに種類を集められたものだと感心した。
そんなKとは逆にアイラは辺りを見回し、目を輝かせている。口なんか半開きだ。
クマを見つけると嬉々として駆け寄っていった。テディベアといってもいろいろ種類があり、色も大きさも様々である。大きな丸く黒い瞳は、アイラの瞳に負けず劣らず輝いている。
けれど、笑顔でアイラに優っている物は無い。

「うーん、どうしよぉ…」
どれも魅力的らしく、あちこちに目移りをさせながらぬいぐるみを手に取っていく。ふわふわとした手触りに、思わず胸に抱き頬を寄せたりもしている。

「…全部買うか？」
「えっ！ほんとっ！？」
アイラは目を丸くして驚いていた。そしてグルリと辺りを見回し、目を瞬かせながらKを見つめた。どんな幸せな想像をしているのだろうか。
あのマンションの部屋いっぱいにぬいぐるみを詰め込み、身動きが取れないくらいに囲まれて過ごす光景が思い浮かび、アイラは嬉々としていられるだろうが自分は到底無理だなと判断する。

「嘘だ。１０体ぐらいまでにしてくれ」
真面目に思案するアイラに思わずククッと笑いを洩らしつつ言った。自分から冗談を言っておいて悪いと慌てて手で口を押さえるが、驚きぽかんとした様子のアイラに抑えきれなかった。

実際金銭的には全てのぬいぐるみを買っても余裕はあるのだが、置くスペースがない。この量があの部屋にぎゅうぎゅうと詰みこまれれば、寝る場所の確保すら難しくなる。それこそ埃っぽくなって咳が止まらなくなりそうだ。
「１０こも持てないよ…」
アイラは自分の両手を見ながら極々真面目にそう呟く。どうしようかとこれまた本気で考えているようだ。
冗談を言った事を怒るかと思っていたKは面喰って、また吹き出した。肩を震わせながら笑うKを見てアイラも無性に嬉しくなり笑顔をみせる。

「3つぐらいなら持てるか？1つくらいなら俺が持ってやる」
笑いで涙の滲んだ目で言うと、アイラはパッと顔を上げた。
「ほんとう！？」
「あぁ」
今度は冗談ではないと頷いてやると、アイラはあっという間にパタパタ駆け出して行った。多少悩みながらあちこちの棚を巡り2つのぬいぐるみを選ぶと、その様子を見守っていたKの元によろけながら戻ってきた。大きさは50センチくらいだが、2つを持てる身長はアイラにはまだ無い。視界が塞がれていて足もとが覚束ない。
「これとこれとね…」
なんとか転ばずに来たアイラからネコとキリンのぬいぐるみを受け取る。手に馴染む柔らかさには心和み、彼女が好むのも少し分った。ネコなんかは首に付いた鈴が軽やかな音を鳴らしている。

両手が自由になるとアイラはまたぬいぐるみ棚に駆け寄り、今度も2つ抱えてきた。けれど、どちらも似たような種類である。
「あとね、こっちのクマさんと、このクマさん、どっちがいいと思う？」
真剣な表情をするアイラの両手には、白いクマと茶色いクマがあった。どちらも黒々とした大きな瞳の愛らしい表情で、首には鮮やかな赤いリボンをして飾り立てられている。

趣味がいい、と思いかけた瞬間、ふと不意に首元のリボンが首から流れる血に見えてた。そこから首が千切れ、赤い血が滴るような錯覚。ただまっ黒な瞳も生気を失った人間のそれに見える。一度その印象がつくと、なかなか頭から離れない。さっきまで少なからず可愛いと思っていたそれらが不気味に映る。
さらにちょうど色違いを2つはアイラの両親にダブる。

「ねぇ、ケイ。どっちがいい？」
何も知らないアイラは愛らしく首を傾げながら問うが、Kは顔をしかめテディベアから視線を逸らす。
「…俺にそういうことは分らない」
できればそのぬいぐるみは止めてほしい。
愛らしいぬいぐるみの顔もひどく歪んで見えてしまう。今までそんなことはなかったのに、病んできているなと自嘲気味に薄く笑った。

「ケイはクマさん嫌いなんだ…」
どう解釈したのかは知らないが、明らかに機嫌が悪くなったKを見てアイラはそう思い至った。不味いことを言ってしまったのかと不安げに下を向き、表情に輝きが無くなる。
「…違う」
そう呟くとアイラの説明を求める視線を感じたが、そのまっすぐな瞳を受ける事はできなかった。
赤いリボンとその色違いのテディベアが首を切って殺した人々に、またアイラの両親を連想させるからだと言えというのか。

「何が好き？」
けれど気を取り直したらしいアイラが言うと、Kは胸を撫で下ろしながらアイラと彼女の抱えているぬいぐるみから視線を外しKは辺りを見回す。
陳列されているどれもがつぶらな瞳で「買え」と訴えかけてくる。
気のせいかもしれないが。

ややあって、Kは棚に手を伸ばすと無造作に1つを掴みとった。
アイラが選んだテディベアを尊重し一応クマであり、赤いリボンを巻き付けていないものを選んだ。
それを渡すと、アイラはきょとんとそのぬいぐるみを見ながら呟いた。

「しろ、くま…ケイはシロクマさんが好きなの？」
心底意外だと思われているのはその表情でわかる。事実、シロクマなんて好きでも嫌いでもない。ぱっと目に入ったものを取っただけだ。おかげで少し後悔するくらい可愛さに欠けている。
「あぁ」
少々バツが悪く感じながら取り敢えずそう答えると、アイラはテディベアを元あった位置に戻しに行った。けれど棚は際どい高さで、取る時にはギリギリ大丈夫だが、戻すとなるとあと少しの所で手は届かず、ケイに助けを求めるような視線をよこした。
ケイは短く息を吐き、キリンをアイラに持たせるとテディベアを受け取り棚に返した。あまりにもあっさり戻してしまったので、アイラは羨ましそうな目をしている。

４本の足で立つシロクマは可愛いさよりはリアルさを追求したものだった。さらには毛足も短く、手触りもネコやキリンに比べ劣っている。レジに行くまで何度ももうちょっとマシなものを選べば良かったと後悔しつつも、嬉しそうにシロクマを抱くアイラを見るとこっちもその気持ちに感化されてしまった。

「それでいいのか？」
「うん！ケイが好きなシロクマさんだもん！！」
会計まで持って行ってする質問ではないが、やはり確認せずにはいられなかった。Ｋがネコとキリンをレジに置くと、アイラも真似てシロクマをレジに出した。
店員は整った顔立ちと独特な雰囲気を纏うＫに思わず見とれてしまったが、仕事中だと気付くと頬を染めながら視線を外す。女性の店員の視線に気づくと、Ｋは不機嫌さをあからさまに顔に出したが、それでもやはり美しさは隠しきれていなかった。
一緒にいるアイラも可愛らしくて、でも顔立ちや雰囲気を含め共通点は無く、血は繋がっていだろうになぜ一緒にいるのだろうかと余

計な詮索をしながらレジを打った。

キリンとネコは袋に詰められたが、シロクマだけはどうしても抱いて帰りたいとアイラがせがんだので今はアイラの胸に抱かれている。空いている片手は来た時と同じように繋がれていて、嬉しそうにニコニコと笑顔を見せ続けているアイラはスキップをしながら歩いた。手が不規則に揺れて歩きにくいが、なんとか合わせながら歩を進めた。

和やかな慣れない雰囲気に戸惑いつつも、知らずと笑みが零れた。

途中夕飯と明日からの食材が無い事を思い出し、久し振りにスーパーに寄った。家にあるのはガスコンロと水道。確か、鍋とフライパンも備えられていたはずだ。ごはんは炊ける、だろう。

食事のメニューを考えることはめったにないKは米と卵だけを買った。卵は栄養価が高く、調理への応用も利く。

アイラは終始落ち着きなくキョロキョロしてばかりで、手を繋いでいなかったらきっと走り回っていたところだ。けれど手を引かれているうちにスーパーを隅々までまわってしまい、他の客からは親子とも兄妹とも見えない2人に興味の混じった視線を送られてしまった。多数の視線に晒されることのないKにとっては居心地が悪いことこの上なかった。

やっとマンションに着いたころには、もうお昼を回っていた。時折、アイラはぐーっと腹の虫を鳴らし、Kもかなり気疲れしていた。

アイラがいるのでエレベーターで15階まで登らなくてはいけないため、辺りを注意深く見回し不審な人影がないことを確認すると、エレベーターに乗り込んだ。アイラは精一杯背伸びをして「15」のボタンを押すと満足げに微笑んだ。

チン、と甲高い音がして扉が開くとそれを合図に勢いよく駆け出してKの部屋の前で立ち止まった。少し遅れて追いついたKが鍵を手

渡すと、少し苦戦しながら開場すると顔の位置にあるドアノブを捻った。けれどドアは子供には重いらしく、結局Kが手伝って部屋に入ることができた。

部屋に入ると急に疲労感が襲ってくる。
それはアイラも同じらしく、疲れたような息を吐きながら部屋の奥へと入っていった。

Kも思わず重い溜息を洩らしたが、ぬいぐるみを室内に運ぶとすぐに踵を返した。
「昼飯買ってくる。お前は、大人しく待ってろ」
まだ自分1人のペースが抜けず、1日3食が基本なことを忘れていた。思い出していればさっき買っておいたのに。

けれど、いいきっかけかもしれない。
「はぁい…」
またついて行くとぐずるかと心配したが、やはり疲れたのだろう。寂しそうな顔をしたが、ぬいぐるみを胸に抱いて素直に従ってくれた。

血臭

玄関を施錠し、通路を髪を風に遊ばせながら進む。
アイラといて少し緩んでいた気を引き締めると笑顔の面影と共に表情が抜け落ちた。たちまちにKを包む雰囲気が張りつめ温度が下がる。これから行うことを思うと、自然と目には冷たく物騒な光が宿る。

非常階段は相変わらず無人だが、薄暗いそこではKの姿も影のように薄く、だが闇濃く感じる。気を抜かずに視線を巡らし、睨みつけるように辺りを警戒する。
ただでさえ音の響きやすい非常階段で、結構なスピードで下っているのに物音と言えばかすかな布擦れくらい。滑るように7階まで下りた。幸い通路に人影はない。

肌身離さず持っているナイフの存在を腰のあたりに感じる。Kにとって最も扱いやすい凶器だ。普段はズボンのベルトの背中の部分に装備しており、上からTシャツで覆って隠している。
幾度となく血を吸い、幾人もの命を奪ってきたもの。このナイフに固執しているわけでは無いが、錆びない様に手入れを欠かさず、刀身は曇りなく危険にギラめいている。

ズボンのベルトに固定されたそれの存在を確認すると、目的の７０９号室へ向かった。人目の付く場所でコソコソしていると怪しまれるため堂々と歩かなくてはいけないが、それでも気配を悟られないため足音は消している。

そしてたどり着いた部屋の前で足を止めた。他の部屋と何の違いもないドア。表札に名前は書かれていないが、中からは笑い声が聞こえる。佐々木と三田の2人に違いないだろう。
昼間から酒を飲んでいるのか声量は大きく、呂律が回っていない。
耳を澄ましてみるが内容は聞き取れず、だが2人以外は居ないらしいことは分った。

好都合だ。余計な手間がかからない。

玄関のノブに手をかけゆっくり捻ってみるが、鍵がかかっているらしく開かない。Kはポケットから複雑に曲がった針金を数本取り出すと、鍵穴に差し込んだ。自分の部屋と同じ鍵の種類だ。開けるポイントは熟知している。
器用に弄くることものの数秒。カチっと音がしてあっさりと鍵は開いてしまった。

中の2人はまだ気づいてはいないらしく出てくる様子がない。そのまま押し入ってもいいが、黒い手袋をはめてインターホンを押した。やはり押し入ってしまおうと考えつつ2度目のベルを鳴らすと、佐々木か三田かは判断できないが乱れた足音がどだどだと近づいてきた。
気配と足音だけで男の接近を窺う。のぞき穴に男が目を寄せるため足音が止まった瞬間、Kは玄関を開けた。

「きっ、貴様はだ――グアッ・・ヴゥ・・・」

ドアに押されバランスを崩したとろこに懐へ飛び込み、躊躇いなく左胸の急所へとナイフを押し付けた。手に確かな感触を感じた。ぐぐっと力を込めてより深くナイフを突き刺すと、鋭利な刃は少しの抵抗を感じつつも奥の心臓を捕らえた。

現れたのは佐々木だった。歳は５０に差し掛かろうというところで、痩せた体の下っ腹だけがたるんでいる。ブランド物のワイシャツのボタンはだらしなく外されていて、さらにズボンも皺が寄っている。

顔は赤く耳元にかかる息が酒臭い。相当飲んでいる。

酔いでとろんとして血走っていた目は一瞬で驚きと絶望に見開かれ、やがて引き攣るような声を出したあと虚ろな瞳を彷徨わせて脱力した。

三田はまだこの惨事に気付かずにいるらしく、近寄ってくる様子も動揺している気配も伝わってこない。

Ｋに力を失い体重を預けてきた体からナイフを抜き取ると、飛び出しこそしなかったが瞬く間に佐々木の胸元が赤く染まっていく。

崩れる体をわざと乱暴に玄関に倒した。重い音をたてて倒れた佐々木はすぐにその場に血を溢れさせ、僅かな痙攣すらもなくなる。

「ささきぃ～??」

不審な物音がしたが、なかなか戻ってこない佐々木を不審に思った三田が漸く腰をあげた。中年太りでぽっぷりとした体には油がのっていてテラついた頭と顔を見ていると吐き気が込み上げそうだ。

こちらもすでに飲んで出来上がってしまっているらしく、まっすぐ歩けていないし、不審な物音を聞いたというのに警戒心の欠片もない。

呆れを感じつつもどこに隠し持っているか分からない武器を手に取られる前に、Ｋは三田の前にすっと姿を現した。

黒ずくめの姿で感情が払しょくされた顔をし、手には血の滴るナイフを持つ冷たい死神のようなＫの姿を視認すると、ようやく三田の

顔色が赤から青へと変わった。
さらに玄関先で先にあっさりと沈黙させられてしまった佐々木を見ると顔を恐怖で歪めながらも舌打ちした。

「お前…組織の！！！」
震える声で叫び、数歩後ずさる。
同胞・佐々木の血を吸ったナイフは三田に向けられていて、鋭く切っ先が光った。物騒な血染めの刃はまっすぐに標的を狙っている。

「K、か…！？」

何度かその名前は聞いたことがある。幹部の一人がえらくお気に入りの暗殺者で、そいつがえらく優秀な奴だということを。その幹部は確実に仕事をこなし、組織内でも高い評価を受けている。そして今目の前にいるのが、その幹部の秘蔵っ子の暗殺者。

実際姿を見るのは初めてだが、そう断言できる自信がある。
これまで修羅場を潜り抜けてきたことも、名高い猛者と会いまみえたこともある。けれどこの青年からはその誰からも感じ取ったことのないプレッシャーを感じる。
狂気や快楽ではない純粋な殺意は磨き上げられたかのように鋭く、そして全身が震えるほど冷たい。
切れ長の目の視線の鋭さ、整った顔はまるで磨かれたナイフの切っ先のように美しく、けれど恐怖を感じずにはいられなくなる。
何の考えも読ませない瞳は深い闇のようで、けれどひどく澄んでいるような気がする。

人ひとりを殺した後だというのに、その顔には苦悩どころか歪みすらなく無駄なく立っている。

射殺されてしまいそうな視線に耐えきれず、三田はじりじりと部屋の奥へと後退しながら両手を頭上に挙げた。
Kはそれをゆっくりと無言で追い込んでいく。
恐怖に震える三田の口からは命乞いの言葉が出かかっては消えた。
歯の根が合わず、がちがちと鳴っている音が聞こえる。それと同時に瞳には絶望の色が次第に濃くなっていく。

少しばかり勘が良い三田には分ってしまった。
この青年が――“K”が命乞い等に耳を貸さないことを。どんな脅し文句も涙ながらの切なる命乞いをも無視して殺しをしてきた目をしていることを。
ターゲットの姿以外は目に入っておらず、殺すことだけを目的に鍛えられた身体と、扱い慣れた凶器。

組織は大事にこの男を育ててきた。
黒く美しき暗殺者の噂は幾度か聞いた。「死神」だの「Ｋｉｌｌｅｒ」だの称され、所詮人の噂に過ぎず誇張しすぎだと馬鹿にしていた。相手に見えぬ恐怖を与え、反逆を牽制する為の情報操作だと思っていた時期もあった。

けれど、その噂は事実。

いま全身で嫌というほど体感している。
コイツが、“Ｋ”だ。漂う威圧感は、たとえ素面（しらふ）で拳銃を持っていても敵（かな）いそうにないとさえ思わせる程。

全身に冷たい汗が流れ始めると、一瞬で殺された佐々木を恨めしく思う。もし面倒くさがらずに先に玄関へ行っていれば、人生の最期にこんな恐怖を味わわなくてすんだのに。

一歩、また一歩と近づくＫに三田は目を瞑った。諦めることが唯一できること。
この青年は自分たち程度の２人なら難なく殺してしまえる。２対１でもだ。
なのに佐々木をこうもあっさり殺し、冷え切った目で自分を捉えている。不気味なくらい平静なこの男は殺人に悦を感じるタイプではない。それが幸いだ。
なるほど、だからＫｉｌｌｅｒか…。死神の名もあながち間違いではないな。
自嘲気味に笑って、からからに乾いた口を開く。
「はッ…裏切りくらいで死神呼ばれちゃな……」
割に合わねぇ。自虐的な笑みを浮かべたまま、三田は意識をブラックアウトした。
三田にはその瞬間がいつ訪れ、そして事が切れたのかすら分らなかった。
首の動脈を切ったことによる出血は多く、Ｋの体にもいくらかは付着した。しかし、黒い服は血を吸ってもさほど変色することなく、顔についた血だけを洗面所を借り洗い落す。
ナイフに付着した血も滴り落ちない程度に佐々木の服で拭い、２つの遺体が完全に沈黙しているかを確認するとＫは何事もなかったかの様に部屋を後にした。
＊・＊・＊・＊

ナイフはズボンのベルトに挟み、再びTシャツで上から隠すと手袋をポケットに突っ込んだ。
お昼時の街中は朝よりもいくらか人が増えているように思う。スーツを着た会社員と思しき人々がランチを取りに時計を気にしつつも同僚と肩を並べている。
返り血にまみれた服だと言うのに、過ぎゆく人は誰もKの犯した行動に気づかない。Kの平然とした振る舞いと、先ほど殺人を犯したばかりの人がこんな場所をうろつくはずがないという先入観が、血臭を消してくれた。

騒がしい話し声も忙しく過ぎる時間の流れも、Kからは切り離されているようにその周りだけ空気が異なっていた。
仕事後の張りつめた殺伐とした雰囲気は無意識に人々をKから遠ざけた。

近くのコンビニに入り、弁当のコーナーに立ち寄る。
お昼時をだいぶ過ぎてしまったので種類は半分くらいしかないが、それでもKには多すぎるくらいでアイラに好みを聞いて来なかった事を後悔した。
パンかご飯か麺か…。その3つの選択でも迷ってしまうというのに、それらには様々な味と種類がある。
悩んだ末、無難な幕の内を2つ購入した。

「おかえり！おなかへったぁー」
シロクマを抱えながらやはり笑顔で出迎えてくれた。この笑顔を見ると、張りつめた緊張感がすっと解ける感じがする。

「…どうした？」
リビングに移動してお弁当を置くと、アイラはKを見つめたまま眉

を寄せた。むっとしたような、何か気にくわない時にする
「これは嫌いか？」
同じものではなく、別々の弁当を買えば交換もできただろに。何を買うのか悩むのだけで精一杯で頭がそこまで回らなかった。
けれどそうではないらしく、アイラは相変わらずしかめっ面をしながら首を横に振った。
「ケイ、変な臭いがするよ」
「…そうか？」
ギクリと震えそうになった肩を抑えた。佐々木と三田のタバコとアルコール臭で満ちた部屋にいたのはほんの数分で、服に臭いが染み付いたとも思えない。
街にはアイラも連れて一緒に出かけたばかりだ。
だとすれば、自分だけは敏感に感じる事ができているものか…。
「うん。なんか気持ち悪い…」
アイラの手がKの服に伸びる。Kは慌てて立ち上がってその手を避けた。
「シャワーを浴びてくる。食べてろ」
アイラの脇を通り抜けて、脱衣所に入る。入口に鍵を掛けて、服を脱いだ。未だに血が付着したままのナイフを、水で湿らせた上着で奇麗に拭き取る。服は上下ともゴミ箱に入れた。
決して安物ではないが、K自身血の臭いには敏感で、それと同じく同業者にはすぐにバレてしまう。洗濯するより捨てたほうが早いし、むしろこの部屋には洗濯機はあってないようなものだから仕方ない。服は言えば買い与えられるし、自分で買うにしても金は余っているから問題ない。
熱めのシャワーをさっと浴びて、タオルで無造作に頭を拭きながらリビングに出る。
上気した体の上にまた服を着るのは汗を掻いて不快だが、上半身裸で現れるわけにはいかない。肌に刻まれた多くの傷跡は見てて気持

ちのいいのもではなく、アイラが見たらどんな反応をされるか心配だった。
詮索をするでもなく、「気持ち悪い」とでも言うだろうか？
意地でも隠し通そうとは思わないが、あえて見せようとも思わないから取りあえずTシャツを着た。

「ケイ遅いよっ！もうお腹ペコペコ…」
リビングの入り口で思わず立ち止まってしまった。
「……先に食べていろと言ったはずだろ」
お弁当を前に、アイラは箸を持ったまま手を付けずに待っている。
Kがシャワーを浴びに行く前に座っていた場所に今もきちんといる。
「ケイと一緒に食べたいの。一人で食べてもおいしくないもん！」
あっさりとそう言うとアイラは無邪気な笑顔を見せた。なんて返したらいいのか分からなくて、無言のままKはアイラの向かいに座った。
「ケイと、シロクマさんとキリンさんとネコさんと一緒に食べるんだぁ！」
アイラの周りには買ったばかりのぬいぐるみが寄り添っていて、シロクマだけが膝に乗っている。
「…汚すぞ」
「え？」
呆れて呟いた。アイラはちょうどお弁当のふたを開け、おかずを取ろうとしていた。
「食べこぼしをするだろう」
意味を測りかねていたアイラにそう付け足してやると、理解したらしく、むっとしてしまった。
「アイラこぼしたりしないよっ！上手に食べられるもん」
そうは言いつつも、Kに従ってシロクマも他の二つの脇に置いた。
K的には3つとも別な場所に移動しろという意味だったのだが、ここはアイラの上手とやらを信用して何も言わなかった。

「ケイ、ニンジン食べてー？」
シャワーを浴びていた間に、せっかく温めてもらって来たお弁当は冷たくなってしまっていた。
アイラは煮物に含まれている一口サイズのニンジンをKの口元に差し出した。
彼女も困ったような表情をしているが、K自身はそれ以上に困惑し瞳を揺らしている。
首を少し伸ばせば口に入る位置にニンジンは迫っている。
――捨てろ。
そう言おうとして開けた口に、気づけば放り込まれていた。
一瞬思考が止まった。何をしているのだと、口を閉じながら考えた。
「ありがとう！Kも嫌いなのあったら言ってね！ニンジン以外なら食べてあげるねっ！」
楽しそうに喜ぶアイラを、Kはニンジンをゆっくりと噛みしめながら茫然と見いた。
コンビニ弁当も不味くはない。口の中に広がる煮物の味を感じながらふと気づいた。むしろこの冷めた弁当が美味しいのかもしれない。
そう気づくと、今まで口にしてきた栄養剤的な物がいかに味が薄かったかを知った。
誰かと食卓を囲むことが苦痛ではないと、初めて思えた。
得体の知れない食品を誰かにどこかで監視されながら食べていた過去もあった。Kが何かを一口含むたびに隣でデータを取られていた時はいつもよりまったく食が進まなかった。妙な緊張感だけを感じていた。

今まで食事とは腹が減るから満たす、ただそれだけに近いことだった。しかし、このような時間が持てるのなら、億劫ではなく楽しいものだ。
Kはテーブルにご飯粒を落としながら食べるアイラに微笑んだ。食

べるのが上手だと自負していた結果がこれか。膝の上になんてあの白いぬいぐるみを置いておいたら絶対汚れていた。
無意識に口の端が持ち上がり、ふっと息が漏れる。
食べることに夢中のアイラも、Kも、この微笑みに気づくことはなかった。

それを知り、驚きを隠せない者はただ一人、闇の中から目を瞠っていた…。

別れの予感

忘れてはいけない。
闇に生きる者は闇でなくてはいけないと。
光と混じればそれはもう闇ではないことを…。

――深夜。
寝静まったアイラに目をやると、Kは漆黒に身を包み影へと身を堕としていく。

「仕事は成した」
誰もいない空間に言うと、それに反応するようにスピーカーから声が流れてきた。
『…早いじゃないか。殊勝だな！』
面白がる声はどこか嘲笑を含んでいて、思い当たる節がないKの中で苛立ちが広がり眉をかすかに寄せた。
平静を装っても内心は決して穏やかではいられないことを相手は知っている。熟知していると言っても過言では無いのに、ワザとこういう態度を取ってくる時は突っ込まない事が一番だ。こういう奴だから諦めろと自分に言い聞かせしかないんだと、さっさと本題に入ることにした。
「情報は？」
『あぁ、そうだったな。ふっ：そんに心配をせずとも既に入手済み

だよ。……我々は決して約束を違えない』
自負するその言葉は虚言ではない。虚言にしないためにも、今日のように組織の裏切り者には制裁として死の制裁が下る。

『榊原雄二には1人、兄がいるぞ』

アイラの父・雄二は、アイラの叔父に当たる人物。
彼女を天涯孤独にしたわけではない事は自分への救いだった。それだけで犯した罪が薄れる気がする。
『名は榊原彰(アキラ)』
もったいぶるような間の後に声はそう告げた。
「…1人だけか？」
母方の姉妹や祖父母に当たる人物がいても良いはずだ。逆に1人しかいないというのは不思議だ。
『おいおい。家系図をどこまで辿らせる気だったんだ？夫妻の交流がありそうな範囲は全て調べたぞ』
笑いながら言う声に怪しいところはないし、組織の情報網は半端ではなく闇に少しでも触れた人物の痕跡や親類縁者くらいならば簡単に辿ってしまう。
何も彼氏彼女や同級生まで調べろと言っているわけではないのに、叔父の榊原彰しか見つからなかったのなら、やはりそういうことなのだろう。

しかしやはり、身内と呼べるものが一人しかいないというのは変な話だ。信を置いている組織の情報にも疑問を抱かずにはいられない。
また、仮に他に身内が存在したとして、組織ですら見付けられなかったのならば自分はどう足掻いたって探し出すことはできない。
それにそんなに身を隠さなくてはならない人物は決して普通の生き方はしていないだろうから。

「そうか…」
頷いてKが踵を返す。
『そうそう。榊原彰は都内の高級住宅街に住んでるよ。お前の住んでいるマンションからもそう遠くない』
声はKを引き留めた。ぴたりと立ち止まり、訝しげに誰もいない部屋を振り返る。
「…」
『なぁに。サービスだよ、サービス』
Kの反応を伺い、嘲笑うような声音。スピーカーを鋭く一瞥すると、Kは無言で後ろ手に扉を閉めた。

＊・＊・＊・＊

部屋に自分以外が発する音があるというのは不思議な感覚だ。それを許している自分もよく分らないが。
安らかな眠りにつく少女はベットに入る寸前まで夜景に見入っていて、あの光は何の光かとひっきりなしにKに質問をぶつけた。
一つ一つ丁寧に返すのはちょっとした重労働だったが、物珍しそうに目を輝かすアイラを見れば答えてやらずにはいられなかったのだ。
言いにくい答えにKが苦い顔をして言葉を詰まらせたのは言うまでもない。
警戒心の無い寝顔は、見ているこちらまで心を和ませる。すーすーと規則的に聞こえる寝息は長い安らぎを暗示しているようだ。
Kは無意識にベットの側まで近づくと、無機質な瞳でアイラを見つめる。
そこでふと胸に抱かれているシロクマのぬいぐるみに気づき、Kは

目を見張る。物にそこまで執着できることが不思議でならないし、何よりどうしてシロクマなのか。ネコもキリンも枕もとにいるが、小さな胸に抱かれているのはシロクマだけだ。

Kにとって大切にしているものは愛用のナイフだが、刃毀れすれば未練なく買い替えられるし、捨てられる。
それは所詮モノで、自分も同じ存在価値だと分っている。
用済みになったり使い物にならなくなれば容赦なく切り捨てられる。
上手く機能していれば生かされる代わりに使われる。
そんなものだ。その扱いに昔も今も不満はない。

それよりも、今は胸がざわめく。

彼女が大事そうにシロクマのぬいぐるみを抱きしめているのを見ると、自分が包まれているかの様な錯覚に陥る。
それは不思議な感覚で、抱きしめられることを知らない自分が何故それが想像でき、心が苦しくなるのか……。
優しく胸を包まれる感触を有り得ないと無意識に拒否し、その度に包む手はきつく胸を締め付けてくる。

躊躇いがちに手を伸ばし額にかかる髪を払ってやるとアイラが小さく身じろいだ。起こしてしまったかと慎重に手を引くが、すぐに寝息は規則的に戻った。
ベットから離れソファーに深く身を預けて深く息を吐くと肩の力が抜けていくのを感じた。
それでも眠気が襲ってくることはない。静かに目を閉じ、眠りに落ちるのをずっと待つ。少女の寝息はすごく安らぎをもたらし、いつもよりも早く睡魔を呼び寄せた。
しかし、今までにないくらい安らぎの空間であってもKが深い眠りに就くことはできず、心の奥底で興奮し続けて少女が寝返りをうつ

度に目が覚めてしまった。

そんな状態であっても今夜はよく眠れているとKは思う。規則的で穏やかな寝息は平和を象徴しているようで、安心しきった彼女に引っ張られそうになる。

けれど長年張りつめていた神経はそう簡単に休まることを許さずに浅い眠りだけをKに与えた。

翌朝。アイラは何かを焼き弾けるような音で目が覚めた。うっすらと意識を覚醒させると、空腹を刺激するいい香りが漂ってきた。

のろのろと布団から抜け出しリビングへと出ると、台所にKの姿があった。

「おはよぉ…」

「あぁ」

コトンと、テーブルに目玉焼きと湯気の立ち上るご飯を置いた。

「朝ごはんもこれなの？」

「そうだが…？」

目玉焼きとご飯。

確か、昨日の夕飯もこのメニューだったはず。今までは同じおかずが続くことなどなく、旬の食材を使って調理されたさまざまな料理ばかりを食べてきたアイラにとっては不思議なことだった。

この前まで家で食べていたいろんな食事が懐かしい。和食ならばこれに味噌汁ともう一品おかずがついていたのに。

それでも目玉焼きは好きだから、ぱくぱくと食べ進める。

怪訝な顔をするアイラに対し、Kは何故そんな質問をされるか分らないと言った顔をしている。要望通りのごはんにおかずまで作ったうえ、昨日の夕飯では美味しいと喜んでくれたのに、と。

「ケイ、お昼は？」

夕食・朝食とこのメニューが続き、思い起こせば食材は米と卵以外Kは買っていなかった。好き・嫌いというよりも飽きてしまう。しかし、Kは米と卵がある限りずっとこのメニューを続けるつもりでいるし、事実、食に無頓着な彼は一か月以上同じ献立でも平然と食べ続けてきた。与えられれば不満もなく文句も言わずに食べられる。食事は所詮生命維持活動の一環で、美食家ではないので食を楽しむ習慣もない。

「まだ分らない。今日は少し出かける予定がある」
「アイラはお留守番？」
「いや。食事が済んだら、お前も一緒に連れていく」
「やった！お出かけだぁ！」
外出の目的など知らず満面の笑顔を見せると、アイラは慌ててご飯を食べ進めた。口の周りにご飯粒がついて、Kは手をのばして口元をぬぐってやる。
「ありがとぉー！ごちそうさまっ」
ペロっと唇を舐めると、食器をシンクに持って行ってくれた。
その後ろ姿を眺めながらKは複雑な気分で箸を運んだ。1口2口とごはんを食べ目玉焼きを突ついてみたりもしたがすぐに食事をやめた。
「ケイ、調子悪いの？」
「そういうわけじゃない。気にするな」
心配そうに見上げるアイラにぎこちなく笑って誤魔化して、Kも食器をシンクに突っ込んだ。

＊・＊・＊・＊

電車を使い目的地まで向かう。

地下鉄から見える景色の変化は少なく、けれど僅かな変化を見つけようとアイラは必死らしい。椅子の上に膝立ちし窓に張り付きながらはしゃぎっ放しのアイラを制止しきれず、Kは座席から落ちないかだけを心配しながら揺られていた。
他の乗客はアイラを無邪気で愛らしい子供としか見ておらず、今のところは問題なさそうだ。

「――――うるせぇッ！！」
突如響いた怒声に、車内は鎮まり注目が一点に向かう。
向かいに座っていた男にKも視線を上げた。先ほどまで寝ていた男は、アイラの声で目覚めてしまったらしく、苛立ちを隠そうともせずに血走った目でアイラを睨みつける。
アイラは初め目を瞬かせて驚いていたが、自分が怒鳴られたと分ると途端に目が潤み始めすぐに大粒の涙が零れ落ちた。
Kの袖を弱弱しく掴んで縋りつきながらしゃくり上げるアイラの背中に軽く手を添えると、眉根を寄せ射抜くような視線を男に送る。
凍てついた瞳の放つ光はまともに受ければ身動きを止めざるを得ないものだった。
しかし男は虚ろな瞳をアイラばかりに向けていてKのことなど眼中に無いようだ。
「さっきからピーピーと！大人しくしてろや！！」
凄い剣幕でアイラを睨みつけ怒鳴る様は、これが大人のやることかと呆れるばかりだ。すっかり怯えてしまったアイラは謝罪の言葉すら出せずにただ泣いている。
周りの乗客は我関せずの状態で目を逸らし、時折好奇心と憐みの視線を向けてくる。

――無性に腹が立つ。

沸々と沸き立つ苛立ち。静かな威嚇に男は気づく様子がない。

「おい、てめぇ…」
謝りもしないアイラにキレた男は座席から立ち上がり、アイラに近づいた。ビクッと肩を震わせ、さらに強くKに寄り添う。
「…何だ？このガキのお兄ちゃんってやつか？」
男は酔っていた。吐く息に酒の臭いが混じていて目も充血している。その姿は昨日殺した佐々木と三田を彷彿させ、そうなるとたちまち不快感が胸を占め苛立ちも増す。

Kはアイラを背に庇うように立ち上がると男と対峙した。
酔いと電車の不規則な揺れで足もとの覚束ない男とは反対に、Kは不思議なくらいしゃんと立っていた。
冷めた目はただ男だけに注がれている。

こんな男を殺すのは造作もない。それこそ、一瞬のうちに。
流石にこの場で殺すことはできないが痛い目を見させる事くらいは許されるだろう。忍ばせているナイフに頼らずとも、こんな男くらい、簡単に――。

血ダルマにされるか否かはKの判断次第なのだが、男はその事にもKの纏うオーラにも気づかない。

周りの乗客は居心地悪そうに目を逸らしている。関わりたくない、早くどうにでもなってくれ、という感じがひしひしと伝わってきた。

男が一歩近寄り、Kも腕を持ち上げようとした時――
「…ご、ごめんなさ、い…！」
蚊の鳴くような声が発せられた。聞き逃してしまいそうなほど震える弱い声だったがKの耳には確かに届いた。
殺意にも似た熱がスーっと引いて、視線を下に落とす。

「あっの、ごめんなさい…うるさくしちゃって…ごめんなさい…」
謝りながらも瞳から大粒の涙が溢れ出しているし、裾を握る手も小刻みに震えている。拭われることのない頬はすっかり涙で濡れていて幾筋もの跡ができている。
アイラは男の怒りと、Kの男を射殺してしまいそうな雰囲気の両方を敏感に感じ取って怯えていた。

しかし酔った男はアイラには目もくれず、怒りの矛先をKに移して睨みつける。
もう戦る気が失せたKは自身の後ろに隠れるように立つアイラに手を伸ばした。
殴られると予感したアイラは身を固くしたが、添えられた手は予想外に優しいものだった。戸惑いつつも頭を撫でて慰め、それからそっと二の腕を引いた。
「降りるぞ」
タイミングを図ったような機械的な車内アナウンスが流れた。本来下車する予定の駅の一つ前だが、あとはタクシーを使えばいい。
間もなく停車し、ドアが開く。

「てめぇ、待てや！」
まだ話は終わっていないと、男はKとアイラの後を追って下車しようとした。
Kは面倒くさそうに振り向くと、長く柔軟性のある脚を男の鳩尾（ミゾオチ）に喰らわせた。
防御することもできず男の体は車内に押し戻される。低い呻き声と同時にぐったりと通路にうつ伏せったまま気絶してしまった。
アイラは茫然と目を丸くし息を呑んだ。他の客もさすがに黙っていられなくなったらしく男に駆け寄ろうとしたり駅員を呼んだりと車内は慌ただしくなった。

しまったやり過ぎたか、と反省するKの背後で扉は閉まっていった。

「ケイ、怒ってる…？」
気まずい空気がタクシーの中に立ち込めていて、それを打ち破るようにアイラは小さく尋ねた。
あの場から逃げるように立ち去る間、アイラはじっと押し黙ってKに手を引かれるままここまできた。
「…、何故？」
あの男とは違い、自分はアイラを怒鳴ることも睨むこともしなかったし、アイラの行動を自分は容認していた。
それに、今はアイラに対しても男に対しても苛立ちを感じていないし、あんなくだらない奴の事をぐだぐだ引きずるタイプではない。
だから怒っていると思われるようなことは何もないと思うのだが…。
Kは怪訝な瞳で横に座るアイラを見つめた。

「だって…ケイ、怖かったもん……」
すっかり涙線の緩んでしまったアイラの瞳はまた潤み始めている。
「俺が…！？」
予想外の言葉に狼狽し、零れそうで零れない涙がKの心を不安定に揺らす。
自分はこんなに人の顔色を窺う性格だっただろうか？

「そんなことはない」と言おうとして、でもそういえば最後にあの男を蹴り倒した時にアイラは少し怯えていたと思い出してその言葉をつぐんだ。もうちょっと手加減していた方が良かったと溜め息交じりに改めて後悔する。

「ちょっと、虫の居所が悪かっただけだ」
あながち嘘ではない答えを返した。もっと気の利いた言葉が言えれ

ばどんなに楽か。
言葉にできない気持ちが喉に詰まるのはすごくもどかしかった。
それでもまだ気にしている様子のアイラの頭にそっと手を置くと、ぎこちなく撫でた。
慰め方など知らず、記憶の隅から行動を掘り起こした。
上手く仕事をこなすとこうやって頭を撫でられていたような気がする。あまり嬉しくも感じなかったが、こうするものなのだろう。
けれどアイラは頭を撫でられるのが嫌いではないらしくほっとしたように小さく微笑んでくれた。
涙の跡が残るその笑顔は、どんな笑顔よりも無邪気で純粋なもののように思えた。

＊・＊・＊・＊

そこは閑静な住宅街で、どこからか犬の鳴き声が聞こえてくる。井戸端会議に没頭する主婦たちを何組か通り過ぎ、一つ一つの表札を確認していく。
大体の位置は掴んだが、何せ高級住宅街。一軒一軒の広さが半端なく、隣の家に行くまでにかなりの距離がある。高い柵に囲まれたそれらの家はセキュリティー設備が万全だ。警備会社のシールがいたる所に貼ってある。
アイラも塀ばかりでは飽きたらしく溜め息を吐きながら歩いていて、Kも彼女の様子を注意深く窺いながら歩くペースを調節した。

「ケイー、まだぁ…？」
何度目かの質問。疲れが声に滲んでいる。
「この家だ」
やっと着いたのは他の家に比べると少し小さくさえも感じる家。し

かし、この土地に居を構える事ができる人間のほうが少ないのだ。
高級住宅に変わりない。

インターホンに手を伸ばし、直前で指が止まった。アイラが怪訝な顔でKを見上げている。
人の気配を感じるし、押せば必ず誰かが迎えてくれるだろう。そう知っているからこそ、押すことが躊躇われた。

しかし、いつまでもそうしている訳にはいかず、軽く力を入れてボタンを押した。

『――ハイ？』
「榊原彰…さんと話がしたい」
『え…？旦那さまとはどういった…？？』
応えたのは女の声だった。家政婦の女なのか、カメラ付きのインターホンから見えるKの黒づくめの格好を訝しがっているのは間違いない。
「榊原雄二のことで話がある」
『……少々お待ちくださいませ』
そう言って声が切れた。

ふぅ、と吐くと、アイラが説明を求める眼差しを向けていた。何の前触れもなく父親の名前が出たからだろう。
「…」
声に出して聞かれない事を良いことに、Kは目線を外し玄関を見つめた。
『どうぞお入り下さいませ』
インターホンからもう一度声がするとキィと鉄の扉が開き、玄関までの道が開かれた。
アイラは先程の疑念も忘れ好奇心に目を輝かせながら、間隔のあい

た石畳をジャンプしながら進む。Kもその少し後を追う。
玄関前で立ち止まると、ドアが開き中年の女性が2人を迎えた。
「奥へどうぞ。旦那様がお待ちです」
折り目正しく頭を下げ、2人を招き入れる。声はインターホン越しに応対してくれたものと同じだ。
スリッパを差し出され、足を入れると磨き上げられた廊下を進む。
大人用のものしかなく、アイラはかぽかぽと音をさせながら不安定に歩き途中何度か転びそうになるのをKはさり気無く支えてやった。
応接間に彰はいるらしい。
2人を先導する家政婦はそれだけ伝えると無言のまま奥へと進んでいき口を開く様子はなくなった。

「…お父さまとお母さまがいるの？」
家政婦はアイラのことなどお構いなしに自分のペースで歩く。
小走り気味のアイラを気遣ってゆっくり歩いてやるが、質問には聞こえない振りをして視線を前だけに固定した。アイラがしつこく聞く事は無かった。

「こちらでございます」
家政婦はある一室の前で足を止めるとドアを数回ノックした。
「旦那さま、お連れいたしました」
どうぞ、と扉越しに声が聞こえてくると、家政婦は扉を開けた。
その部屋は明るい光が窓から差し込む接間に相応しいものだった。
調度品も決して粗末な物ではなく、どれも値が張るだろう。
家政婦は一礼すると来た道を戻っていく。

「始めまして、のはずだな。弟…雄二の友人かい？そんな風には見えないが…」

頬笑みを浮かべながら榊原彰は座っていたソファーから立ちあがった。彼は、弟の雄二にどこか似ていた。眼尻に入った皺は年齢によるものだけではないだろう。
故・榊原雄二の兄といえど、年はそんなに離れていないようで、垂れ下がる眼尻はこの地位を築くまでの苦労を物語っているようだった。
人の良さそうな笑顔を浮かべながらKとアイラを見定めている。面識がなく、明らかに会社関係者という訳でも無さそうな2人を態度に出さずとも不審がっている。

「雄二が亡くなったのは聞いているかい？」
「…はい」
「なくなった、って？」
彰は重々しく言い出し、Kは浅く頷いた。隣に腰かけたアイラは首をかしげ語句の意味を推測している。人が“亡くなる”という言葉には馴染みがなかった。
Kはそんなアイラを見る事が出来ず、説明してやることもできなかった。視線を彰付近に彷徨わせて場が流れるのを待った。彰は人の死の意味すら理解していない少女を不憫な目で見つめている。

「…。説明は、あとでお兄さんにしてもらいなさい」
彰は苦笑交じりに優しく諭すように言って、Kに視線を移した。Kは迷惑極まりないと憤慨しながら、それを表に出さずに目を伏せた。頼まれたところで、説明する機会があるはずもない。それは彰の役目になるものであって、その意味をアイラが理解した時にはもうそばにはいられないのだから。

「ところで、今更だが君たちは誰だね？そろそろ自己紹介をしてほしいのだが」

子供連れという理由から危険人物でないと判断し招き入れたが、不審者だ。彰は2人の顔を順番に見る。
黒づくめの姿は光のもとには似つかわしくない。表情は乏しいというより暗い瞳の仮面をつけたまま変化をしていない。一般人を装っているつもりなら、明らかに普通では無い。幼い少女が警戒心無く連れ添っているのが彰には不思議でならなかった。
勘の良い彰はKの発する常人とは異なる雰囲気、佇まいに本能的に危険を感じていた。

「こいつに見覚えはあるか？」
「…？」
Kはアイラを前に押し出すようにして彰と向き合わさせた。
彰がじっとアイラを見つめるが、やがて首を振った。
「申し訳ないが覚えがない」
「だろうな。今までずっと人目に触れずに育てられてきた」
「……何が言いたい？」

彰の眼光が鋭くKを射抜く。一瞬見せかけの優しさは消えて低く脅すような声音になった。けれどそれもすぐに元の優しげな顔へと戻った。
言葉の真意を探ろうとKとそしてアイラを交互に見やるが、やはり分らずに首を振った。
ただ、アイラには何か引っかかるものを感じた。今が初めて会って面識も全くないはずなのに、そんな気がしない瞬間があるのも確かだ。ぱらぱらと記憶のページをめくって少女の影を探そうとするが、どこにも見当たらなかった。

わ か ら な い か ？

Kは無言で問いかける。
いつもの自分なら用件のみを伝えすぐに事を済ませてしまうのに、今日の自分はどうも事を引っ張りたがる…。

アイラを凝視していた瞳がぱっと見開かれた。

「――！ま、さか…？雄二の？いや、でもアイツに…？」
困惑した瞳はアイラに、そして確認を求めKへと移った。
彰は何か言いたげに口を開いては、「いや、まさか」と首を横に振り否定しながら落ち着こうとしている。
アイラは何の話をしているのかとKに問うような視線を投げかけるが、Kは正面の彰に向けられていて視線を下げようとはしてくれなかった。疎外感を感じてむっと唇を尖らせた。

「私のはずはない…雄二の、か？…もしかして、君も…！？」
眉間にしわを寄せたまま彰は訊ねた。瞳の奥がゆらゆら揺れている。
「俺は、違う」
その返答で全てが分ったと、彰は深く長い溜め息を吐いた。こめかみを押さえ、頭を振った。沈み込むようにソファーに腰を落ち着けると、やっと一つの答えが明確に浮かんできた。

「雄二の娘か……」
疲れ果てたような声が漏れた。縦皺をくっきり刻んだ顔をゆっくりと上げ、アイラを見る。そしてやはり違いようのない事実にため息を漏らした。
あぁ、アイツの小さい頃の面影がある…、と彰は改めて感じた。目元なんかは特にそっくりだ。
姪だと認識すればするほど共通点が浮かび上がり、その度に確信へ

と繋がった。

「…その娘の名前は？」

「アイラ」

両親に洩らすなときつく言われ続けていた名前を、誰にも言わないと約束したKが簡単に口を開いてしまったのだ。アイラは驚き、そして両親に怒られてしまうと泣きそうになりながらKの袖をひっぱり見上げた。

「ケ――っ？？」

ケイ、と言おうとした口を素早く塞いだ。行き場を失った音はKの掌に吸い込まれた。

不審なKの行動にも、彰は目の前の事実を整理し受け止めることだけで精いっぱいで気付かなかった。

「証拠はあるのか？…あぁ、そんなのDNA鑑定でもしてしまえばいいか」

そんなことしなくてもあの目元は弟にそっくりで、遺伝しているとしか思えないが。やるだけ無駄だということは分っている。それに、隠し子なんてあいつのやりそうなことだ。

自問自答して彰は苦笑した。

「それで。アイラちゃんが弟の娘らしいのは分った。…君たちは私に何を求めるんだい？」

ゆっくりとアイラの口から手を離し、黙っていろ、と視線で告げる。

不満げできょとんとしたアイラの頭上にはクエスチョンマークが見えそうだ。そして勝手に約束を破られて怒ってもいるようだった。

そんな表情も、笑うか泣くかの顔しか見ていなかったから新鮮に感じる。

「君がこれまでこの娘…アイラちゃんの保護者代りだったのだろう。雄二からの援助が絶たれたから私に頼みに来たのか？」

彰は指で膝をトントンと叩く。金銭問題の笑いになると、ほんの少し瞳に翳が差したのをKは見逃さなかった。金には貪欲な人物なのか。

黒づくめの男はひどく肝が据わっているが、そう年齢は高くないだろう。青年と表現できる。顔の造形は美しく、身のこなしや振る舞いも悪くはないのでそこを買われたのかもしれない。
けれど若造が、この時代に子供一人育てる事は容易では無い。
それに早々に気づき私に援助を求めてきたことは的確で優秀な判断で、容易に予想できる。
何を考えているか分からない顔をしているが、腹のうちは案外単純なこと。いきなり訪ねてくるのは礼儀知らずだとは思うが、最近の若者なら仕方ない。

「アイラを、貴方に引き取ってもらいたい」

真摯な瞳のKに彰は驚きの眼差しを向けた。
Kの隣にちょこんと座る少女は、彰を観察しながら2人の言葉に耳を傾けている。混ぜてもらえない会話は諦めたのか、応接間の不思議な絵画や幻想的な写真に視線を彷徨わせて気を紛らわせている。

彰は聞き間違いかと耳を疑った。
予想していたものとは違った。そしてあまりにも突飛過ぎではないだろうか。

「どういうことだね…！？」

「俺のもとにアイラを置くことはできない」

きっと堪える事は出来ない。無垢な瞳が憎悪に染まる様を、直視できるはずがない…。

遠くない未来。アイラは両親の“死”を知り、俺が“殺した”ことを理解する。

近しい者を殺された人が抱く感情も向けられる視線も嫌というほど熟知してしまっている。

「急な話だとは分かって頼みに来ている」

今は無用な考えを追い払うと、再び困惑に揺れる彰の視線をまっすぐに捉えた。

「……。私は、一向に構わないよ。妻だって子供は好きだし、幸か不幸か私にはまだ子がない」

Kは頷く。それも調査済みだ。

彰の妻は子供を産めない体で、その事を気に病んでか病院に通っていた時期もあったということも。けれど結局今まで子を成すことはできなかった。

今まで知らなかったとはいえ、姪にあたるアイラはそう拒絶されないだろう。それにアイラは聞き分けも良く、よく笑う子でその場を明るくしてくれる。彰と彼の妻との間でもすぐに馴染んでうまくやっていってくれると思う。

「だが、この子はそれを承知しているのかね？離れたがっている様には見えんぞ」

ぴったりと寄り添う様にKの隣にいるアイラ。いつの間にか部屋の観察には飽きたのか、Kを見上げていた。

それに、Kもアイラを鬱陶しがっている様子は見られない。けれどやはり遊び盛りの青年は表に出さないだけで内心はアイラを邪魔に思っているのだろうか。

「君はアイラちゃんにとって兄のような存在で、君もそう思っているんじゃないのかね？」

兄のような存在？
Kはその言葉に思わず失笑した。彰は不思議そうにそれを見る。

一秒たりともそのような地位に就いた事は無い。
俺は彼女の両親を殺した暗殺者であり、アイラにとって憎むべき存在なのだ。それ以外の何者にも成りえない。
住む世界の違う、相いれてはいけない相手。

現在のアイラの意思は分らずとも、この先どう思われるかを身をもって知っている。
向けられる憎悪の感情を知っている…。

離れたいとか離れたくないではなく、離れなくてはならないのだ。
――それは自分のために。
一種の逃げともいえるがそんなことはどうでもいい。

「…この子には時間をかけて私が説明しよう」
「あぁ」
Kの自嘲的な笑みの意味をどこまで理解したのかは分からないが、彰は深い訳があることを察して全てを引き受けることを承諾してくれた。

「彼女の荷物はどこに？業者を向かわせるが…」

「無い。服も今着ている分しか持ち合わせがない」

どこに保管されているのかは分らないが、あの家にあるのは確かだ。だが、子供服くらいを買う余裕は彰にはあるから心配はいらないだろう。

アイラの過ごしていた部屋を知らないため、案内しろと頼まれることは避けたい。

「…帰る。アイラを頼む」

言えた義理ではないと分っているが、頼まずにはいれなかった。

帰ろうと身を翻すと、アイラも覚醒したように踵を返した。話から除外され続けて暇そうにしていたがもうそれも終わりだと思うと顔が明るくなる。

「もう用事おわり？帰るの？？」

服の裾を後ろに引いて、Kを引き留め訊ねた。

一歩を踏み出しその手を振り切る事は容易だが、体は言う事を聞かなかった。思わず立ち止まってしまったものの、Kがどうしたものかと困ってアイラを見下ろしていると、彰はアイラに近寄りしゃがみ込むと、優しく諭すように言った。

「君はここに残るんだよ」

けれど努めて優しく言っているのだろう彰の言葉は、違和感を感じずにはいられない。優しい言葉には不慣れなためにそう感じるだけだろうか？

「なんでー？」

アイラはくるっと彰を振り返ると首を傾げてみせた。きょとんとし

た瞳が彰に向けられる。
白く柔らかな手はしっかりとKの裾を握ったままだ。
「今日から私と一緒に暮らそう。雄二ほど贅沢はさせてあげられないが、不便はさせないよ」
例え彰の優しさが見せかけだけであっても、少なくとも自分といるよりは幸せになれる。普通に暮らすことがアイラにとって一番良いことだ。
人を殺すことだけを教わってきた俺にアイラを育てる事はできない。命令に従うことが自分の中の常識で、殺しをすることにはまったく抵抗がない事は表の世界でも、いや、裏の世界でさえも普通ではないということは何となく分かっている。
――いつか俺はアイラを殺してしまうかもしれない。
ふとした気の迷いが起こるかもしれない。そうでなくても危険は付きまとう。自分の存在自体が陰惨で危険な存在だ。
もしもアイラを手に掛けるようになったら、もう戻れないような気がする。
得体のしれないモノに捕らわれ、今以上に狂った殺人鬼と化してしまうような…。そうだけはなりなくないと考えている自分が不思議でならない。
「やだッ！！！！」
しんみりとし始めた空気を裂いたのは甲高い涙声だった。視線をやると真っ赤な顔をして唇を震わせているアイラがいた。
「ケイと一緒がいい！！ケイと帰るっ！！！！」

Kがアイラの口を塞ぐ前に言葉は溢れ出す。
すぐに大粒の涙が溢れ出し、頬を濡らす。鼻をすすってしゃくり上げている。うーっと唸りながら溢れる涙を拭おうともせずに肩を震わせる。

「ここに居た方がお前のためだ。言う事を聞け」
「やだぁ！やだぁ！！」
再び声が響き、Kはその勢いにたじろいだ。しゃがみ込んで視線を合せていた彰に背を向け、Kの足にしがみつく。
ここまで駄々をこね、我儘を言う子供ではなかったはずだ。好奇心旺盛ではありにせよ、聞き分けは良かった。人が困っていると察すればこちらがバツが悪く感じるほど我慢できる子ではなかったか。

「シロクマさんだってキリンさんだってネコさんだっていないもんっ！！」

あぁ、とKは思い出す。
買ったばかりのぬいぐるみをアイラが大切にしているのは知っている。慣れない生活での心の拠り所だ。榊原邸にある大事にしていたクマとも引き離されている。あまり我儘を言わずに諦めてくれたが、内心は悔やんで寂しがっていたのかもしれない。そして今度こそは大切に知ると決めているのだろうか。複雑な気分だった。
ただ一人彰だけはその意味を測りかねていて、Kに目配せをした。
「ぬいぐるみです」と、小さく伝える。

「…ケイ君。今日は引き取ってもらってもいいかね？大切なぬいぐるみと君なしでは泣きっぱなしになってしまうだろう。それに、弟の隠し子をどうやってこの家に入れるか、それも考えなくてはいけない」

ひとつ息を吐くと、苦笑混じりで彰は頼んだ。
とっさに出かかった抗議の言葉は喉もとで詰まった。無理にでも置いていこうかと考えていたのに、そう言われては無理に頼むこともできない。
それに肩を震わせながら自分にしがみついているアイラを引きはがすのはどうしても無理だった。必死にKに縋りついている姿はあまりにも小さく頼りなかった。
その様子を見て唇を噛み眉を寄せながらもKはしぶしぶと言った感じで了承し、アイラの手を引いた。
驚くぐらい素直にその手に引かれて、歩き出してくれた。そうは言ってもやはり握る手はきつ過ぎる位で、歩きにくいほどKに寄り添ってはいたが。

「来れたら、また来てくれ」
「近いうちに」
別れの挨拶にしては微妙な言葉だったが、アイラに気を取られていたKは引っかかりを感じることなく聞き流してしまった。
Kとまだぐずり気味のアイラは、彰の呼んだタクシーに乗り込んだ。自動でドアが閉められると車体が揺れ、間もなく車は発進した。

アイラはぴったり寄り添いながらKのお腹のあたりに顔を埋めて彰の見送りさえも見ようとはしない。ただしゅんとした顔をしている。
それとは対照的に彰は笑顔で手を振っていた。
Kは一瞬だけその姿を目の端に映すと、目的地だけを簡潔に運転手に伝えてぼうっと過ぎゆく景色を見つめていた。
バックミラーに写る危険な笑みに気づくことなく…。

刺客の刃

部屋に入るまでアイラはずっと涙を目に溜めていた。
いつもの笑顔はないが、それでもひとまず涙が止まってくれて内心ほっとした。
子供にぐずられるのはどうも落ち着かなかった。

タクシーの中では彰との話については一切触れず、Kはただ黙っていた。アイラも訊ねようとはせずにKにくっついていた。
小さな手でKの服の裾を握って放そうとはしない。
Kは脇目でそれを確認するが、何の反応もせずに窓の外へと視線を逸らした。
気まずそうにするタクシー運転手は道を急いでただ前だけを向いていた。

マンションの少し手前で降ろしてもらった後もアイラはKの裾をつかんだままだった。
手をつないで歩くよりも幾分歩きにくい。
とぼとぼと歩くアイラに合わせて進むのは、すごく長く感じられた。

朝の残りのご飯と、目玉焼きを焼いた。会話無くして食べるソレは美味しくない。食器がぶつかる音だけが響く。
目の前に座るアイラはちびちびとご飯を口に運んでいて、食が進んでいる様子はない。
Kも自分の分を機械的に咀嚼(そしゃく)した。
「ごめんなさい…」

食事が終わったころアイラが口を開きようやく重い沈黙が途切れた。
食器を片づけようとして上がっていた腰を再び下ろし、Kはいきなり何の事だと当惑してアイラを見返す。

「アイラはなにか悪いことしちゃったんでしょ？だからケイは私を嫌いになっちゃったんでしょ？お父さまもお母さまも本当は…アイラを嫌いになったからケイに連れてくように頼んだんでしょ？」
幼いが、自分の考えを持てる年齢だ。アイラはアイラなりに考えてその答えに行き着いた。
自分なりに推測して出した答えは間違っているが、正解よりは優しい。
本当にそれが現実なら良かったのに。

「誰もお前を嫌いになんてなっていない。俺とお前は一緒にいる事はできない、ただそれだけだ」

嫌いなわけじゃない。
けれど一緒にいることは不可能なのが現実だ。
過去が変わらないのと同じで、その事実も変わることはない。

「なんで！？あそこのおじさんヤダ！私のこと絶対嫌いだもん！」

彰の話題が急に出てきたことを怪訝に感じたが、アイラは確信をもって言っているようで眉間にしわを寄せて不快をあらわにしている。
見ている限りは人の好い笑顔を浮かべていたのに、アイラは嫌われていると感じたらしい。K自身も好印象は持たなかったが、自分よりは数倍マシな人物だろうと判断した。
アイラを嫌っていようが、一度引き取れば世間体もあり存外な扱いはされないだろう。
少なくとも命の危険はない。

「すぐに慣れる」

突き放すような言葉の意味をアイラがどう解釈したかは分からない。けれど見開かれた瞳を直視することができず、逃げるようにその場を離れた。

アイラはそれきり口をきこうとはせず、午後はずっとキリンとネコだけを抱きながら外を眺めていた。
置き去りにされたシロクマはどこか寂しそうに部屋の片隅あった。
時折すすり泣いているのかと感じる事があったが、確かめる勇気も慰める術も分からずに知らないふりをして興味もない本に視線を落とすしかなかった。

＊・＊・＊・＊

異変が起きたのは空が赤く染まり始めた頃。

「…」
Kは不審な物音を聞いた。玄関付近から聞こえたそれは、布擦れの音と金属が擦れる音。

――鍵穴に何かが差し込まれたか？

Kはアイラの位置を確認する。
泣き疲れたのか窓際で寝ていて、当然のことながらこの状況に気づいていない。
高層にあるこの部屋なら、窓からの危険は少ないだろう。

ただ、玄関から一直線上にあるので、そこから姿が丸見えになってしまう。けれどそれに対処する術を頭の中でシュミレーションし、規則正しく肩が揺れていることを確認すると、Kは物音を立てず玄関に近づいた。

覗き穴を確認せずとも、扉一枚向こうに人がいる事は確かで、それがただの客でない事も確かだ。
あまり複雑でないこのマンション鍵構造は、その手のプロならば間もなく開けてしまうだろう。
こんな脆い護りの壁が無くとも自分の身は守れると自負しているが、今はアイラがいる。もう少し警戒しておくべきだったと後悔した。
だが、事前に対策していたとしてそれも時間稼ぎにしかならないだろう。

静かで人目を寄せつけないやり方をすることから、相手は同業者。
どこの誰かは気になるところだ。今まで身を潜め、尾行にも終始気をつけていたKの居場所を知る人物。
いや、情報提供者は他にいるだろう。

カチャン、と鍵が回った。
予想以上に時間をかけていたが、やはり素人にしては早すぎる。手慣れた空き巣は留守を確認してから鍵を開けるから、その線は消え、やはり同業者だと確信した。

ドアノブがゆっくりと回された。
決して焦らず、慎重にドアが開かれてゆく。じれったいくらいのスピードは余計に緊張感を煽る。

Kはもう一度アイラの位置を確認し、そして自分もドアを開ける位置からは死角になる場所に身を潜めた。

やがて外からの光が差し込み、人一人通れるくらいの隙間が開いた。
しかし中の様子を窺っているのか、なかなか踏み込んでは来ない。
やたら慎重なのは、まだ経験が浅い証。
Kくらいに経験を積めば中に何人いるかぐらいは外からでも把握できる。

あと一歩…。
あと一歩を踏み込んで来れば、殺せる。

早すぎれば逃げられたり深手を負わせられない可能性がある。けれど遅すぎればアイラへ危険が及ぶ。

気に掛けなければいけない人が側にいるというだけで、いつもとは調子が狂いそうになる。緊張感も高まってくる。

Kはナイフを握りなおし、その時に備えた。

緊迫し、焦れったい状況は初めてでは無い。これ以上の修羅場をいくつも超えてきた。
命の危険を感じたことも少なくない。

そのなかで培った勘が訴えかけてくる。

――何かを見落としている、と。

それが重大な何かなような気がして、胸が落ち着かない。
それはいま対峙しようとしている訪問者のことだが、決してそのことだけではない。

何だ？
何を見落としている…？？

何を――…

Kが答えを出す前に、招かれざる客は一歩を踏みこんだ。Kは疑問を押しのけ、迷いなくナイフの切っ先を首元めがけて突きつけた。急に現れたKの存在は予想外だったらしく、客は目を見開き首筋にナイフを押し当てられたまま壁に押し付けられた。
悲鳴は驚きの声にまじって小さく漏れたにとどまった。

全ては一瞬の出来事で、玄関の扉はまだゆっくりと閉じていくところ。そしてドアの閉まる重い音が響く。

「動くな」

Kの低い声が男の鼓膜を震わせる。それに連動するように背筋もぞっと震えた。

男の首に突き付けられたナイフの切っ先は薄皮一枚を破り血をにじませている。ナイフに力を込めると、ツーっと赤い筋ができた。脅しでないことを理解し、男は視線を首に落とすと驚きと畏怖の籠った瞳でKを見る。

男にとって突然飛び出してきたKの存在は全くの予想外であって、あの一瞬で押さえられたと言うのに体の自由は完全に奪われてしま

っている。
動くなと言われても、実際そう簡単には行動を起こせそうにはない。拳銃を持つ手はKの片手で関節を固定されて動かせないまま顔の横にある。指は動くが、引き金を引いても誰を怪我させることもできない。
せいぜい人が集まって騒ぎになる程度。いや、引き金を引く前に殺されるだろう。
拳銃ですぐに撃ち殺されなかっただけマシだと思うべきなのだろうか？
いや、いまはナイフで切り裂かれなかっただけと訂正すべきだ。

「裏はどこだ？」
「言う訳ないだろ？」
Kの抑揚のない声が男を詰問する。余裕のない状況だが、男は負けずと不敵に口元を上げた。
肩をすくめて強がって見せるが、Kはそんなことを気にも留めていない。
「…お前は何だ？」
「雇われの殺し屋だよ。俺の他にも雇われてるなんて聞いてないぞ」
舌うち交じりで男は吐き捨てる。
引っかかる言葉は、先ほどの疑問を再沸させた。
「――なんだと！？」
「先越されちまった。この場合報酬どうなんだ？」
動揺するKに気づかず、男は警戒心を解いて肩をすくめて見せた。
彼の視線にはアイラが横たわっている。男は獰猛な光を含ませて彼

女を凝視する。
夕日に照らされ床ごと紅く染められている。
「……誰からの、依頼だ」
「あ？言う訳ないっつったろ？」
それでも、確認せずにはいられない。
「おい、まだあのガキ死んでねぇな」
男の瞳がさらに怪しく光る。
Kが止めを刺し損ねたと思ってか馬鹿にしたように笑った。
「俺が止め刺しといてやる」
くつくつと笑いながら身じろいだ。手に持っていた銃を持ち上げようとしたのだ。
「――？…ア、ガッ・・ハッ・・？」
拳銃は床で一度弾んで足元に落ちた。硬質な音が部屋の空気を震わせた。
その上に鮮血が降り注ぐ。
男は首を押さえ、目を血走らせながらKを凝視している。何かを問いたげに口を動かしているが、求められる問いを知りながらKは口を閉ざす。
苦しそうな息がヒューヒューと漏れ、血が気管に流れ込み激しく咳き込んでいる。

「…動くなと、言ったはずだ」

しかしそれよりも、アイラが狙われたという事実がKに行動を起こさせた。

銃口が向けられそうになった瞬間にナイフは横に引かれた。
裂けた肉からは血が溢れ出す。重要な血管は傷付けられていないのか、即死だけは免れている。けれどこのまま放置すれば出血多量で間もなく命を落とす。
男は慌てて首元を押さえた。しかし無情にも指の間から溢れ出す血は床に血溜まりを作っていく。
ぴちゃん、ぴちゃんと次第に血液は失われていく。

青ざめてきた表情の中で、眼だけが異常に血走っている。床に這いつくばりながらもKを見上げて睨みつけた。

――はやく、殺せ…！

視線でそう訴えかける。
しかしKはその訴えに気付きながらもあえて手を下そうとはしない。もがき苦しむ姿を見て快感を感じる者も多いが、Kにそんな趣味は無く、何も感じることなく生気を失ってゆく姿を見下ろしていた。
情報はもう聞き出せないならばこの男にもう価値は無い。
苦しもうが関係なく、床を汚されることだけが不快だ。血臭が部屋に充満していく。

夕日の赤さが毒々しく演出されている。

いつの間にか苦しそうな息使いは静まり男は息絶えていた。それでも血はじわっと広がり続けている。

Kはアイラに近づく。人一人が死んだばかりのこの部屋には似つかわしくない安らかな寝顔。苦しみ血の気が失せた男の死顔のせいで、それが異物に感じてしまう。

その異質さが、Kとアイラの住む世界の不和を明確に示している。

眉をひそめながら手に付着した血を服の裾で拭うと、腕をそっとアイラの体に回し抱き上げた。アイラは薄らと目を開けたが、Kの姿を確認するとまた閉じた。

早くここから離れなければ。

居場所が割れているのなら、不利になるのはこちらで危険も高くなる。

刺客に出した者が戻って来なければ、すぐに失敗したと知れるだろう。それで諦める相手ならいいが…、そうでない可能性が高いと推測できる。

部屋を出る手前で、Kは部屋に散らばるぬいぐるみを目に止めた。

逡巡してから、ネコとシロクマだけを手に取った。キリンは持ちにくく、アイラを抱えながらでは持ち出せない。

非常階段を駆け下りて、タクシーを止めた。

「世田谷に向かってくれ」

車が発進すると、アイラは漸く目を覚ました。目を擦りながら、流れゆく景色に目を留めて、Kに視線を移した。

「…どこいくの？」

「昼間行ったところだ」

「ケイと、お別れなの…」

ポツリと呟いてアイラは不安げにKを見つめる。Kは苦い顔をしながら答える。

「いや、まだ分からない」

はっきりしない言葉に不安は煽られる。

しかしKはアイラの心情を察している余裕を持ってはいなかった。

ただ不穏な予感に揺れる気持ちを抑えるので精一杯だった。

狙われる生命

なぜアイラの居場所がバレた？
それよりも、アイラの存在を知られているのはなぜだ？
頭に浮かんだのは胡散臭い笑顔を浮かべた男――榊原彰。
彼しかいないと確信する。
アイラは一見すればただの小娘で、わざわざ大金を出して殺す価値など無い。
けれど、“榊原”アイラなら話は変わる。
政治の話には疎いが、アイラが榊原雄二の実の一人娘となれば、莫大な遺産相続の話が絡んでくる。アイラの存在一つで、取り分は数億単位で増減するのではないだろうか。
そうなれば、彰がアイラの存在が公表される前に消そうと考えつくのは自然のこと。

昼間も訪れたこの家は薄暗くなった景色の中にぼんやりと浮かび上がっている。
タクシーは玄関の前で静かに停車するとドアを開けた。
「お前はここで待っていろ」
「早く戻ってきてね」
アイラは眉を下げながら不安げにKに乞う。Kはアイラの頭を無造作に撫でると運転手に運賃の他余分にお金を渡して出て行った。

アイラの胸にはシロクマとネコのぬいぐるみがある。目を覚ました当初はキリンが無いことを不思議がっていたが、お留守番していると言って納得させた。
運転手はアイラの事を気にする様子もなく金勘定をしながら鼻歌を歌っている。
アイラは2つのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめ、不安を紛らわせるように顔を柔らかな毛にうずめた。

インターホンは鳴らさずに敷地内に侵入した。
道路からは死角になる位置まで回り、人気を確認すると塀と雨どいを使って二階のベランダに降り立つ。
セキュリティーの事は癖で午前中の内に確認してあった。役立たせることがあるとはその時は思っていなかったが。
そういう癖を持っていて良かったと、この時ばかりは暗殺者として生きていたことに感謝し、その皮肉に笑えた。

降り立ったベランダから部屋に誰もいないことを確認すると、ナイフの柄でガッ！と窓ガラスを叩き割った。
小さい穴が開き、手をわずかに傷つけながらも指を差し入れる。素早く大きな音を立てないで割ることができる限界の大きさだ。

その穴を使って器用に鍵を開けるといよいよ家の中へと足を踏み入れた。ガラス片を踏むとパキッとさらに細かくなる音がして顔をしかめる。どんな状況にせよ、物音をたてて都合がいい事はない。
神経を澄ませるが誰かが駆けつけて来る気配はなかった。まだKの侵入には誰も気づいていないようだ。

安堵に息をついたのも一瞬で、Kは慎重にドアを開けて廊下に出る。
2階には誰も居ないのか、シンとしている。
階段を降りている途中で、足音がこちらに向かってくるのに気づいた。足音が軽いのできっと女性だろう。
身を隠そうかと逡巡したが得策では無いと判断しそのまま足を進めた。

「え…ぁ――――!?!?」
「黙れ」

降りきったところで、予想通り若い女とばったり出会った。
女はすごく驚き目を見張っていたが、Kはすばやく女の背後に回ると冷静に女の口を塞いだ。
ナイフの刃をチラつかせると、女はコクコクと必死に頷く。女性の目に一瞬映ったKは闇のように暗く、そして非常なまでの冷たい印象を与えた。
口を塞いでいる手から女の震えが伝わってくる。ガタガタと足まで震えていて、Kが抑え込んでいなければ崩れ落ちてしまうかもしれないくらいだ。

「榊原彰の…妻か…?」
昼間は外出していたらしく顔を合せなかったが、たぶんそうだろう。
香水の匂いと化粧の臭いがツンと鼻をつく。
Kの質問に女はまた必死に頷いた。

「彰は何処にいる?」

リビングか、食堂か、応接間か、居間か、書斎か…。探る場所は少ないが、余計な力も時間も使いたくない。

口を塞がれているため、視線だけで居場所を示す。女の視線をたどってKもそちらを確認した。
「あの部屋か…」
彰の妻は未だ喉元に添えられているナイフを見て体を震わせる。少しでも下手をすれば殺される…。慣れた手つきで自分を捕え、今にも切っ先を引きそうな闇に生きる男。臆せずにはいられない。上手く回らない頭は護身術だとか通報だとかの知識を絞り出す前に、本能的な恐怖だけを与え続けた。
「お前など殺す価値もない…邪魔をしなければの話だが」
そう言ってKは女を解放する。
彰の妻はドタッと腰を抜かし、叫び声も出せずにKから離れようと後ずさった。ある程度距離を取りやっと息がまともに吐ける様になっても、彼女は叫びそうになる口を押さえて必死に身の保身を図っている。

仮にも愛し合い、結ばれた仲だというのに…。コイツは自分が助かるために夫を売った。躊躇うことなく、脅しに屈して自分の命を取った。
人は簡単に相手を裏切り、その上に生きようとする生き物。そんなことは十分に分かっていたはずなのに、少しでも情けをかけるという選択肢が頭に浮かんで、そしてすぐに消え失せた。
この女よりはまだ刺客として送り込まれてきたあの男の方がマシだ。暗殺者としての信条を貫き通して死んでいった。
こんなヤツは、殺す価値もない。ナイフに余計な汚れが付くだけだ

から。
震えるだけの妻を冷たく一瞥すると背を向けて示された部屋へと向かう。

書斎の前で立ち止まるとわざと気づくようにドアを開けた。
彰は机に向って仕事をしていたようで、苛立った声を出しながら面倒くさそうに入口を振り返る。
「ノックぐらいしろと……なっ！！？君は昼間の――」
彰はいったん言葉を切り、そして笑顔を貼り付けると平静を繕った。
「どうしたんだい？また来るとは言っていたが…私の予想より少々早いな。まだ準備は整っていないのだが…」
キィと椅子を軋ませて立ち上がると、Kの方に歩み寄る。
「白々しい事を言うな」
「…何の事かな？私にはまったく心当たりがないのだが…」
ピタリと足が止まり、彰の声のトーンが落ちる。
しかし、笑顔を張りつかせたまま妙な雰囲気を漂わせている。裏に渦巻くものは笑顔一枚じゃ隠しきれていない。
「お前がアイラを殺すように仕向けた」
Kは彰を睨みつけるが、彰は平然と受け止めている。
けれど、Kが手にするナイフに目が行きはっと身を強張らせたのも一瞬で、口元を妖しく歪ませた。
取り繕ってきた笑顔はあっさりとその姿を変貌させた。

くくっと抑えきれない笑いが喉から漏れ出す。

「ずいぶん物騒なものを持っているな。そうそう手に入らないような物だが…雄二が与えたのか？血が付いていないようだから、妻はまだ生きているんだろう。まったく、無断でこんなところまで侵入させて声のひとつあげないとは」

まじまじとナイフを観察したあと、忌々しげに悪態を吐いた。それから、ふっと笑いを洩らす。

妻が死んでいないということは、殺せなかったということではないだろうか。大人びた独特の雰囲気を持っていても、所詮は十代の若造。怖気づいたに違いない。

無表情で食えない奴だとばかり思っていたが、可愛いところもあるものだ。

「あの小娘の存在で私の人生は大きく変わるんだよ。せっかく雄二が死んで全てが私の物になるはずだった…。会社も、遺産も。全てが私の物にね」

若い君には分らないだろうが、と付け加えて首を振った。

隠すつもりもなくなったのか、彰は目を細めて理想の未来を思い浮かべ、そして眉をぎゅっとよせて不快感を露わにした。

Kの事など眼中にないという感じで言葉を続ける。

「なのにっ！あの小娘がいればそれが大きく変わる！！…金の大切さは分るだろ？小娘1人がいなければ私はさらに安泰なんだ」

金欲に溺れ、醜さを露呈させた彰をKは静かに見つめていた。

頭に血が上るでもなく、蒼い炎が冷たく己の中で燃えているのを感じる。

「…榊原彰。お前が、アイラを殺すよう依頼したのか？」
「あぁ。お前等が帰ってすぐに」
悪びれる様子もなく、あっさりと答えた。
Kの反応を窺っている。怯えたり、怒り狂ったりすることを期待している。
「どこに依頼した？」
「知らん。金さえ払えば何でもやってくれるとこだ」
Kの無反応さを見て、彰はつまらなそうに肩をすくめて見せた。
隠しているわけではないだろう彰の様子にKは眉を顰めることしかできなかった。
そんな組織団体は探せば数え切れないほど存在している。暴力団が絡むところがあれば、Kの所属するような組織的なところもある。
「アイラは安かったよ…」
挑発する様に鼻で笑った。
Kがアイラを育ててきたと思っている彰はさらに次のネタでKを逆上させて楽しもうとしている。
にたにたした笑みにKの冷たい炎が煽られる。
「雄二たちを殺してもらったときよりもだよ。あぁ、小娘1人分だから当たり前か……？」
「な、に…！？」
Kは耳を疑った。

神経を逆なでする笑い声に混じって、確かに聞こえた言葉。

「アイラの両親を殺すよう仕向けたのも…」

「そうだ、この私だっ！」

悪びれる様子もなく高らかと言い放った。

それが正しく当り前のことであるかのように言い切ると、無表情を崩したKに向かって説明を始める。

「弟のくせに会社を継いで、おかしいと思わないか？お蔭で私はこんな惨めに暮らさなきゃならなかった…。妻だって私が会社を継ぐものだとばかり思って嫁いだも同然だ」

アイラの祖父母にあたる人たちは、弟の雄二ばかりを贔屓にしていた。口が上手く何かと世渡り上手な弟にすっかり手綱を握られていた。

それに妻が金目当てで求婚に応じてくれた事も分っていた。

けれど、それでも良かった。擬似的なものでも、愛を感じ、肌を重ね…子供こそ出来はしなかったけれど、夫婦の絆は築かれていると信じていた。

ならば自分は与えられた地位でできる限り頑張ろうと思っていた。

弟に対する嫉妬を妻のための労力と愛にすり替えていた。

なのに――。

「…知ってるか？アイツは最近雄二の所に通っていた。……愛人の座を狙ってるんだ！！」

一方的であったが、愛していたのに。

そして妻も相愛は叶わなくても自分の愛を受け入れてくれていたの

に…。
弟に対する嫉妬を妻の笑顔を見て紛らわせていた。その存在さえも、弟は奪っていこうとする。
「アイツには沢山のものを奪われたんだ…！！だからせめて、命3つくらい奪う権利、私にはあるだろう？」
ひどく極端で、残酷な見解。
すり替えたつもりでも心の奥底で燻(くすぶ)っていたどす黒い感情は簡単にタカが外れて表へと溢れだした。それはもう制御不可能で、行動のすべてを支配していく。
「雄二もヤツの妻も死んで、愛しい愛しい隠し子さえも死んだ。これで全ては私の物になるんだ。妻も、私から離れはしない。また受けとめてくれる…！」
言葉の端々には憎しみと、嫉妬と、愛が見え隠れする。
歪んだ愛し方だ。最愛の妻は簡単に彰の命を売ったというのに、それでも手放せないのだろうか？
擬似的な愛でも“愛”は“愛”と彰は受け止めている。それ欲しさに、命を簡単に削除していく。
けれど彰の代わりに、俺が手を下した。
アイラの両親とこの現状はまぎれもなく自分が手を下した結果。最終的に引き金を引いてしまったのは自分…。
「雄二が裏の仕事をやっていたのも知っている。私が紹介したんだ」
引きつった残忍な笑み。
嫉妬と劣等感、そして歪んだ愛は彰をずっと前から蝕んでいた。命

の重さの感覚さえも麻痺させるほどに。

「殺されるに十分な理由にするためにな」

いずれ警察は雄二が裏でやっていた所業を知る。そうすれば、捜査の手はそちらに伸び、彰に及ぶ可能性は少なくなる。

すぐにでも殺してやりたい衝動をぐっと堪え、彰は今まで機会を窺っていたのだ。

「アイラは死なない」

「なに？まだ息があるということか…？」

それまで口を閉ざしていたKはゆっくりと言葉を発し、彰をまっすぐに捉えた。

依頼した暗殺者も存外使えないものだと落胆する。

「まだ死んでいない」

はっきりとそう告げると彰は不満げに鼻を鳴らし、けれどまた口端を釣り上げて不敵に笑う。さっさと死んでおけば良かったのにと言うかのように。

刺客は間違いなく再びアイラを襲う。その幼く無垢な命の灯を完全に沈黙させるまで。

一度受けた依頼は完遂する。それがルール。

「殺させない」

Kは静かに彰を見据えた。

「…くくくっ！お前に何ができる！？1人目はなんとかうまくかわしたか？だがそれは無駄な徒労に終わるだろう！」

その表情には侮蔑が含まれていた。ただの餓鬼に何ができる、と。Kは並ぶ者がいないほど強い。アイラを連れて逃げる事も可能だ。けれど例え逃げ回ったとて、いつかは必ず痛手を負い、殺されるだろう。そして幼いアイラは常に何かに脅える生活をしなければならない。

普通とは無縁の、不幸な人生を送らせたくはない。

「契約を取り消せ」

契約を取り消す1つの方法は契約者が多額のキャンセル料を払ってそれを破棄すること。

「違約金というものがあるんだよ」

「俺が払う」

正確な金額は分らないが、おおよそ分かる。アイラを日の元に送り出す資金にしては安いくらいだ。

彰はマシな嘘を吐けという視線を投げかけ、口元を歪めて肩を竦めて見せた。これだから世間知らずは、と。

「貴様は馬鹿か？ここまで来てそんな事するはずがないだろう！」

望んだ未来はすぐそこにあると信じている。あと一人の少女の命は風前の灯火なのだから。

「これはお願いではない。“警告”だ」

予想通りの答えに、Kは脅しを含めつつも諭すように彰に言う。
しかし、彰はその言葉と言い方に機嫌を害したようで、眉間に皺を寄せただけで首を縦に振ろうとはしない。

「馬鹿を言うな。金が入れば、貴様を消すことすら容易い」

彰は逆にKを脅す。欲に溺れた笑みがKの神経を逆撫でる。

「最後の警告だ」

彰が雄二の会社を奪う様に引き継ぐことも、妻を振り向かせようとすることにも興味は無い。アイラの財産でさえ、好きに使えばいいと思う。
勝手にやってくれて一向に構わない。

けれど、彰はアイラを殺す気だ。
自分のことしか見えていないこの男にとってアイラはただ邪魔な存在。邪魔ならば、殺してしまえという考えは簡単には拭えないだろう。
この男ももう戻れないところまで来ているのかもしれない。

それでも、彰はアイラのたった1人の親戚。
社会的にアイラを保護し育てられるのは彼しかおらず、そしてまた契約を取り消せるのも彰しかいないのだ。

「契約を取り消せ、榊原彰」

「――断る」

鼻で嘲笑する音が聞こえたかもしれない。けれどそれは一瞬でくぐもった呻きに変化した。

光が一瞬で真横に流れただけだった。

少し遅れてヒュッと息の漏れる音がした。そしてぱたたっと数滴の赤が床に斑点をつける。

ぴったりと寄せた体を離すと、彰は血を噴き出しながらずるずると崩れ落ちた。

Kに距離を詰められたと気づいたか否かですぐに呼吸が乱れ、首から何か噴き出すような感覚。痛みも熱さ感じる前に目の前に暗幕が引かれた。

蚊の鳴くような苦しそうな呼吸もすぐに消え、体の痙攣も間もなく止まった。

血が広がっていく床の上に這いつくばった彰の濁った眼は、Kに何かを問う前に完全に光を失った。

Kは全身に返り血を浴び立ち尽くしながらその様子を黙って目に映していた。

握っているナイフからは鮮血が滴り落ちている。

アイラの親族はすべて消えた。

冷たい視線で亡骸を見下ろし、充満していく慣れた血臭にゆっくりと目を伏せた。

与えられた選択

しばし部屋には静寂が訪れた。
書斎にある死体はもちろんのこと、Kもそれと同じくらい無音である。じわじわと広がっていた血もいつしか動きを止めて赤黒く変色している。

Kがこの静けさの中の違和感に気づいた時のは、普通でない気配を感じた時だった。
これまでの経験で培った敏感な警戒網に不審な気配がすっと混じった。明らかに素人ではない複数の気配は注意していなければほとんど感じられないものだ。

「……誰だ」

背後の闇を振り返りながら問う。

アイラをタクシーに乗せっぱなしだった事を思い出し舌打ちした。
連れてこれば良かったとは思わないが、こんなところで油を売っている間に戻れば良かった。

依頼された組織はまだ彰の死を知らない。
よって、契約はまだ取り消されたことにはなっていないのだ。派遣された暗殺者が彰の顔を知っていればいいが、そうでない可能性の方が大きい。
大抵、依頼は暗殺者に直接依頼するのではなく、組織や団体に依頼する。そしてその組織が暗殺者を雇ったり、またはKのようなお抱

えの暗殺者を派遣するのだ。
それに大事なのはターゲットであって依頼者ではない。情報漏れを懸念して余計な情報は与えられない。

そんな単純なことを失念していたと後悔すると同時に、どうしようもない不安が沸き立つ。
一般人をなるべく巻き込まないよう心がけている者なら運転手と一緒のアイラを手に掛けるようなことはしないだろうが、今この場所にはただならぬ気配がある。
ターゲットのアイラをただ放置してここに来るはずがあるだろうか。

殺気を感じないからこそ、この場にあるのは不自然すぎる。どこかピンとこない。
殺す気でないのならどうしてここに来るのだろうか。その目的は…？

Kは思案しながら目を細め闇に眼を凝らすと、そこからすっと影が浮かび上がった。

「いやぁ、残念だよ、K」
「…！」

不本意だが聞き馴染んだ声は、一瞬ですべてをKに理解させた。
現れたのは初老の男。スピーカー越しの接点しかなかったが、この独特のイントネーションには聞き覚えがある。組織に入った当初から耳にしていたものに違いない。

「お前は……」

男の後ろから、4人の男達が音も無く現れた。
感情を読ませまいと心がけているようだが、Kに対する疑問の念や

好奇心が見え隠れしている。
その点ではまだ未熟と言えるが、不審な行動をとれば即座に蜂の巣にされるだろうことは明白だ。
８つの目は監視するようにＫに貼りついている。

「私が誰だかは薄々気づいていると思うが…。篠田と呼んでくれていいよ」

篠田…。
組織に篠田という男がいるのは知っていた。しかしこれまで指示や指導をしてきたシノダがその男と同一人物だとは結びついていなかった。
知っていたからと言って、この状況が変わるものでもないだろうが。

それよりもこの男は……

「さて。なぜ私がここにいるか…それも察しているか？」

ちらと足元に転がる彰の死体を確認しながら言った。
口元には笑みが浮かんでいる。Ｋを嘲うでもなく、ただ純粋にこの状況を楽しんでいる。瞳の奥のひどく鋭利的な光とのギャップが不自然だった。

考えに没頭しかけていた頭を切り替え、Ｋは篠田に向きなおる。
篠田が歩きだしたことにより部屋の空気は動き、廊下から彰のものとは別の血臭が漂ってきた。
それを嗅ぎ取った瞬間に血の気が引いた。
一瞬身は強張り、そしてすぐに怒りで小刻みに震えた。

「アイラは、どうした…！？」

低くドスの効いた声は、その場に居る者を委縮させるには十分だった。篠田の背後の男たちは、緊張した面持ちで生唾を飲む。
Kは手ぶらで自らは銃を備えているのに、気を抜けばいとも簡単に殺られてしまいそうな錯覚に陥った。飲まれたといってもいい。
篠田はその高圧な雰囲気に苦笑しながらも、肩をすくめて余裕を見せた。

「怖い怖い。…心配しなくとも、お前の大切なアイラちゃんは無事だよ」

篠田は廊下に目くばせすると、もつれそうな足音とともに男に連れられアイラが震えながら現れた。男は片手でアイラの二の腕を乱暴につかんで引っ張ってきた。
アイラの口は男のもう片方の手で塞がれていて、胸にはシロクマのぬいぐるみがきつく抱かれている。
Kに助けを求め、不安に全身を震わせていた。大きな黒い瞳は涙を溜めながらKを見つめている。
倒れている彰の血の気が失せて硬直している様を見て、さらに顔を恐怖にひきつらせる。

その様子にKがぎりっと奥歯を噛み、拳をきつく握る。
「おい、放してやれ」
Kが殺気を孕ませた視線を送ると、篠田はくくっと笑って短く命令した。
アイラを拘束していた男はすっと離れた。アイラはそれと同時に駆け出し、Kの足に飛びつく。そしてぎゅっと抱きつくとひっくひっくと肩を震わせて泣き始めた。
Kは肩に優しく手を添えながらも、視線は篠田から外さなかった。

「K」
篠田の顔に笑顔はない。
チラとアイラを見て、それからKに視線を戻すと言葉を続けた。
「榊原彰は死んだ。お前が殺したんだよ、K。我が組織へ依頼されたことと知ってか？」
「…いや」
それまで組織に従順で、冷静沈着に与えられた仕事を完璧にこなしてきた男が、いきなり反抗したと知った時に受けた衝撃は大きかった。そしてそれと同じくらい失望した。
これまで教え込んできた事には自信があるし、K自身の仕上がりも予想以上の出来だった。
それなのにここにきてこんなことが起こるとは青天の霹靂だ。
その行動の原因がたった一人の少女が原因だと気づいた今、それ以上に興味が湧いているのも事実だが。

「知らなかったとはいえ、依頼主を殺し組織に仇をなすとどうなるか分っているだろう？」
「…」

何度も教え込まれてきた。反逆者の末路を見たこともあるし、自らが制裁を加えたこともある。
しかし、まさか自分もその道を辿る事になるとは……夢にも思っていなかった。

「お前は優秀だ。…ここにいる誰よりも」
だからこそ、危険な芽だ。反乱分子になるくらいなら摘んでしまった方が得策だ。
その何と惜しいことか…。

「だから――」

「俺を殺す、か…？」
Kが言葉を引き継ぐと、篠田は笑顔で肯定した。
「だが、お前を失うのは組織にとって痛手になる。お前は優秀なだけでなく、何かと便利な存在でな」
そこまで言ってふぅ、とため息を吐く。そしてアイラを庇いながら立つKに目を細めて冷やかに笑った。
「お前は、そんな目をしてはいなかったはずだ…。今さら何を求めている？」
目？求めているもの？
…意味を測りかねるが、今は些細なことだ。
「生憎、鏡を見る習慣はない」
「くくッ！お前らしい。興味があるところだが、まぁいい。このまま殺してもいいが、一度だけチャンスをやろう」
篠田は人差し指を立てた。
「チャンスだと？」
Kは訝しがった。
長く組織に従事してきたが、今までそんな機会を与えられた者を知らない。みな問答無用に裁きを受けた。
「なぁに簡単なことだ。お前がいつもやっていたことをすればいい」
「…」
Kと合せていた視線を思わせぶりにゆっくりと下ろしていく。

「殺せ」

篠田の視線はアイラを射抜いた。

「…何故…」

ただ茫然と口にした。篠田は驚きに眉を寄せる。

「おいおい。頭が弱くなったのか？そのガキが今この状況をつくってる。お前の反抗の原因だろう」

その種を消せば、Kが組織に仇なす理由はなくなる。子ども一人の命で許そうというのは、この組織の処断にしてはすごく寛大だ。

アイラは関係ない、と言おうとして、それは喉の奥で止まった。今まで考える事を否定してきたが、榊原彰を殺したのは間違いなくアイラを守るためで、篠田からすればそれは教育していないことだ。反抗したつもりがなくてもそう取られて仕方がない。けれど、アイラを殺させないために自分が勝手にやったことで、アイラのせいというのは違う。いまさらアイラを殺す理由なんてないはずだ。

「殺せ。昔のお前なら簡単にできることだ」

Kの考えを察する様子もなく篠田はもう一度命令した。

これまで女子供関係なく屠ってきた。数も分からないほどに。殺せと言われ、それが自分の生きる道だからと、そう思い血を浴びてきた。ただ無心に手を下すことを、その意味も考えずに繰り返してきた。

そうだ。もういまさら人を殺しても、どうせ何も感じることはない

のではないだろうか。
それがきっとアイラでも…。
しがみ付きながら震える彼女は、今、ただのターゲットへとなったのだから。

「…」

手は未だに彰を殺したナイフを握ったままだ。腕はアイラのちょうど頭の後ろにある。手首を捻り刃をあてて、引き寄せるように突き刺すだけで事足りる。
虚ろな瞳で見下ろしたが、すぐにそれは揺らいで雑念が混じった。
難しい事は何もないのに、添えた手は宥めるようにアイラを支えているだけで動こうとはしない。

「どうした？お前がロリコンで、その子供に惚れ込んでいるようには見えないんだが」
馬鹿にした笑いが篠田から洩れる。

俺がアイラに惚れ込んでいる…？
そんな馬鹿な、とK自身からも自嘲的な笑みがこぼれた。

自分が人を好きになるなど、ありえない。
生憎、そんな権利も心も持ち合わせてはいない。

けれど刃を突き立てられないのは———

苦しげに眉を寄せ苦悩する青年は、暗殺者として生きるのには必要のないことを知ってしまった。

孤高ともいえる素質と実力を兼ね備え、忠実に任をこなしてきた。
氷のような美しさはそれだけで鋭利な刃物のように近づくのを躊躇わせ、しかしその表情を寸分も狂わせぬままに血に濡らす。
見ているこちらが震えた。その完成度の高さに。これ以上の暗殺者は生まれないだろう。

今後の計画もあった。まだまだKは実力を高め、組織に貢献させるつもりでいた。
幼き頃から育て上げ来きた大事な道具。

それを、ただ一人の小娘に、震えて泣きすがるだけの小娘に壊されてしまった。いや、まだ完全に崩されたわけではない。

けれどすべてを小娘に奪われるくらいなら…

「殺せないのなら、お前を殺すまでだが？」

惜しい。
昔から愛用している道具を手放さなくてはいけないのは、とても望むところではない。

最終警告と同時に激鉄を引く重い金属音が鳴り、篠田を取り巻く男たちが一斉に銃口を向けた。それはKだけに向けられている。
緊張に身は強張るが、同時に少しほっとした。
アイラは依頼されたターゲットではなくなった為、Kに殺される以外に価値はなくなったからまだ少しは安全だ。

篠田を含め6人。ゆっくりと視線を巡らせて逡巡する。
手持ちの武器はナイフ1本だけ。それでも傷は負えど逃げられない

状況ではない。急所さえ外せば逃げ切れるだろう。
皮肉だがそのような訓練も十分に受けてきた。
第一撃すべてはかわしきれないが、次を撃たれる前に拳銃を一丁奪えばいい。

勝算はある。

Kはナイフで傷つけないようにアイラを引き離す。
戸惑いを見せるアイラの瞳は不安と恐怖に揺れる。顔は涙で濡れている。
その顔を見ると胸が締め付けられる思いだ。こんなことに巻き込み、怖い思いをさせてしまったことを申し訳なく思う。

「離れていろ」
身を屈め優しく諭すと、アイラは一度躊躇ったがシロクマを胸に強く抱き、一歩だけ離れた。
細く微笑むと、小さく息を吐き出した。

「アイラ。お前の両親はもう死んでいる。俺が…殺した」

何故だか、言わなければいけない事のように思った。
だが言ってからやはり後悔した。覗き込んでくる瞳から逃れるように視線を外す。

「死んだって…、なに？ケイ、お父さまとお母さまに何かしたの…？」

アイラの瞳には憎悪も何もない。ただ純粋に質問しているだけだ。
アイラが意味を知らなかった事は、Kにとって幸か不幸か分らない。
けれど、胸がとても痛んだ。説明してやる言葉も見当たらない。

重くなった頭を軽く振って、立ち上がる。
Kは覚悟を決め、ナイフの切っ先を篠田に向けた。
空気が一変して張りつめ、息が詰まりそうになるのをアイラは感じた。
茫然と見上げるアイラの視線を感じながらも、決断を変えようとは思わなかった。
その行動を挑戦と受け取り、篠田は薄く微笑みを浮かべた。
Kだけなら簡単に命を繋げることができる。赤子の手をひねるように簡単なこと。
それなのに、こいつは小娘を連れて逃げ切ることを選んだのか。
Kと篠田の視線が交る。
相変わらずというか、Kが何を考えているのかは全く分からない。
そういう風に育ててきたのだが。
「やはり惜しい…」と溜息混じりに呟いて控える男たちに目配せする。
男たちはKに照準をきっちりと合わせ動きを止める。状況は把握しきれないが、危険な状況だと気づいたのか、アイラは落ち着きなくKと篠田たちに視線を走らせる。
篠田が口を開きかけた瞬間、汚れたナイフはKの手から離れ…
「――撃て」
軽い音と共に床に突き刺さった。

次の瞬間、耳をつんざく様な轟音が響いた。
引き攣るようなアイラの一瞬の悲鳴もかき消される。
体が後ろに倒れていくのを、Kは踏ん張りきれずに大きくよろけた。
幾数もの銃撃の音は重なり合い、2，3発にしか聞こえなかった。
けれど体に受けた衝撃は全身に鋭い痛みを与えた。

「……それが答えか、K」

驚きとも嘲笑いとも言えない口調だった。ただ、もう自分には興味がなくなったのだな、とだけ感じた。

アイラは耳を通り過ぎていく銃声をぼんやりとしか認識していなかった。
それよりも、目の前で赤い雫を散らしながらよろめくKの姿に目を奪われていた。悲鳴は一瞬で、あとは声も出せずに口を半開きにして目を見開いていた。

ようやく轟音が鳴りやむと、Kは踏みとどまっていた力が無意識に抜け床に崩れ落ちた。
ゴドッという鈍い音でようやく目の前の情報を処理したアイラはKに駆け寄った。

「ケイっ！！！」
銃声は止み、銃口からは煙が上がっている。硝煙の臭いが血臭を上塗りして充満している。
「ケイ！ケイ！！どうしたの！？ねぇ、ケイッ！！！」

Kに何が起こったのこは分らないが、Kの状態は恐怖を掻き立てた。
腹のあたりは濡れていて、規則的に血が噴き出す。腹のあたりを押さえてながら呻き声をあげている。
苦しそうに眉を寄せるKの姿は、篠田には懐かしいものだった。

「帰るぞ」
篠田はKを一瞥すると、踵を返した。　無言で従う男たちも拳銃を懐にしまうとKとアイラには興味なさげに背を向ける。

あぁ、と思い出したように篠田は立ち止まった。
「アイラちゃん。Kが住んでたアパート覚えてるかな？一週間後。迎えに行ってあげてもいいよ」
アイラに背を向けたまま篠田は語った。
「Kの事を知りたくはないか？ご両親のことも。もちろん強制はしないよ」

Kが自らの命と引き換えに守った少女。
なんの魅力も感じられない、ただの小娘――。

「では、さようなら」
最後まで背を向けたまま、アイラの返事も聞かずに歩きだした。
アイラが言葉を理解し、聞いていたかは分らない。それも一種の賭けみたいなものだ。Kが最期まで執着した少女に興味はあるが、例え姿を現さなかったとて何の未練も残らない。

いつの間にか外は夜色で、闇も濃くなっている。
その闇に溶け込んでいくように、篠田は消えていった。

血の道への誘い

「……っ…な…」

2人取り残された薄暗い部屋で、Kは息も絶え絶えに呟いた。
ひゅーひゅーと掠れがちに吐き出される息にも血臭が混じっているようだ。

「ケイ？もう一回言って？聞こえなかったよ…」
篠田の言葉をKはアイラより理解していた。
「行くな」と、もう一度言おうとして血にむせて咳き込み言葉にならなかった。口元に赤い斑点ができる。Kを覗き込んでいたアイラの顔にも少なからずそれが付着した。
「お口を怪我したの？血が出てるよ…」
こんなに血が出ているのを見た事はないのだろう、躊躇いがちに口元にのばされる手をぼんやりと見た。

アイラはもう何にも縛られる必要は無いのだ。これまでの過去をすべて忘れて、新しい道を歩むべきだ。
篠田の手を取れば、これ以上に人道に反する辛いことが起こるのは必須。
痛みを伴う訓練と、アイラのように心優しき者なら精神的苦痛を味わう任務。
血を見る世界などアイラには似合わない。

「ケイ、お腹痛いの？大丈夫？？」
アイラがそっとKの腹部に手をやる。生暖かい血液で濡れていて、びちゃっとした感触があった。アイラが触れると小さく痙攣して呻

き声をあげてしまった。蒼白な顔に、脂汗が浮かぶ。
アイラはびくっとして手を引いてKの様子を窺って小さく謝る。

「ア…イラ…っ」
喋るたびに口に血の味が広がる。
腹部は痛みを通り越して熱さしか感じない。そこに、再びアイラの小さな手が添えられた。そこだけ優しい温かさを感じる。
流れ出る血を止めることはできないが、痛みはいくぶん和らいぐようだ。

「…、――…」

今まで何人もの死の瞬間を見届けてきた。それが今、自分に訪れようとしている。
少し離れた所に横たわる榊原彰のように、逃れられない終りがすぐそこまで迫っているのだ。

心配そうに覗き込むアイラの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。Kの頬に落ちたそれは血を溶かしながら顎と首を滑っていく。

体中の熱は幼き頃を彷彿させ、Kは重い瞼の裏にそれを見た。
激痛を訓練と称して与えられ眠れぬ夜。
死なない程度の治療は乱雑で、今も体には多くの傷が残っている。
ひきつるように疼く傷に気付かぬふりをしながら新たな傷を体に残す。

血まみれでうずくまった時に、ただの一度も身を案じてもらった事など無かったのに……。

頭は思い出す必要のない、忘れたはずの記憶まで呼び起こしてきた。

———過去。

冷たい雨の降る日だった。

ゴミ溜めに目を止めた人間がいた。
そこには同じ人間…と呼ぶには躊躇するが、ソレは確かに人の子と呼べるものがあった。
肌は土気色で、肋骨が浮き出る程に痩せこけていた。ぼさぼさの黒髪に艶は無く土埃や汚れを含んでいる。
ゴミの中の食料を探している途中で気を失ったのか、片手はゴミの中に突っ込んだままだ。
辺りを見回すが近くに親や仲間がいる様子はない。孤児だ。
逡巡した後に薄く笑うと、車を呼び寄せてその子供を連れ去った。
ほんの気まぐれで、賭けのつもりだった。
当たろうが外れようが、身寄りのない孤児。どうとでも処分できる。

「気付いたか？」
うっすらと目を開けて、声のした方を向きながら体を起こすと腕に鈍い痛みが走った。確認すると腕には何本かのチューブが伸びている。しかも真っ白の清潔なシーツの上にいるようだ。
少年は茫然とチューブをひっぱると、そばにいた男はそれを手で制した。
「口はきけるのか？？言葉は分かるか？」
男は問う。少年は声もなく小さく頷いた。

「名前は？」
少年は首を傾げる。
「いつも何て呼ばれていたんだ？」
「……よばれない」
数秒間をおいてからの返事には辛さなど含まれておらず、ただ事実のみを淡々と発しているだけだった。何の感情も読み取れない。

名前が無いのか…？
ゴミ溜めに倒れているような子供だ。そんな事もあり得るだろう。
これまでどこでどうやって生きてきたのかは分らないが、日の当たらない世界で生まれて、そして運の廻らないまま生活してきたのだろう。でなければ、発見次第孤児院に入れられているはずだ。

「親は？」
「…おや？」
「パパ、ママ、お父さん、お母さんを知っているか？」
ふるふると首を横に振る。

男は“使える”と確信した。口の端が持ち上がるのを止められない。
この少年が可哀想なまでに不幸である程、好都合だ。
誰にも知られず、最小限にしか関わらずに生きてきたのなら、使える…。この分なら戸籍すら登録されていないだろう。

（良い人材が手に入った）

男は貧相な少年を見下ろす。
小さく細い体は、直ぐにでも餓死してしまいそうなくらいである。
しかし、死臭は感じない。
少年の瞳は悲しみも、苦しみも、絶望さえも映していない。
幼くしてすべてを諦めた、虚無―――。

（この年でそんな目をする奴が他にあるか…）

突然に見知らぬ人に連れられ去られても、少年は疑問に持つことも泣き叫ぶこともしなかった。

上手く育てれば、きっといい道具になるだろう。

男は久しぶりの昂揚感を感じ、引き上がる口元を止められなかった。

1人喉の奥で笑う男を、少年はぼんやりと見つめていた。

圧し掛かる罪の意識に潰れれば、捨ててしまえばいい。そんな軽い考えで少年を手元に置くことに決めた。

少年は見た目と言葉の発達具合から、3歳くらいと予想された。名前は特につけなかった。それでも不便は無いから。

風呂に入れて汚れを落とすと、まあ見れる顔だちをしていることに気づく。柔らかい黒髪に、暗い影の落ちる瞳はどこか人を惹きつける不思議な力がある。放っておけない幼さと、けれど近寄りがたい雰囲気が少年を取り巻いている。

少年は極度の栄養失調で、骨が浮かび上がるほどに痩せていた。すぐに食事を与えたが急には胃が受け付けずに吐いてしまったため、点滴と流動食を与えて様子を見た。

痩せ過ぎていてすぐには肉がつかないが、それでも少年は見る見る間に元気になっていった。

それでも、口数は少ないし笑顔を振りまくようなことはなかった。

暗い瞳で物事を傍観し、必要最低限の動きしかしようとはしない。

与えられた食事にもがっつくことはせずに淡々と口に運んだ。

そして少年が回復したのを契機にこれまでの手厚い対応が一変した。

与えられる食事は見た目のままに美味しそうな匂いを放つが、口に含むと何とも言えない味が広がった。痺れるような痛いような感覚は全身に広がり呼吸すらままならなくなることも珍しくは無い。激しくせき込み、血を吐く日も多かった。
食事が安全でないと判断すると、少年は食事をとることを拒否した。しかし男はそれを強制し、少年は眉を寄せながらも言葉に従い、そしてまた苦しむ。
その様子は常に数人の白衣の者たちに監視され、記録されていた。毒への抗原抗体反応の過度を調べ、慣れによりその量を調整していく。

しかし、一年が経つ頃にはそんな食事にも慣れてしまった。常人には致死量になる毒に対しても免疫ができ、そう簡単には死なない体になった。
それでいて毒の有無は判断できるため毒見役として使われたころもあった。

初めて少年が手にした武器はナイフ。
果物ナイフのようなもので、人を殺すには役不足だ。それを渡すと男は「殺してこい」と言って自分と同じくらいの少年と闘わせる。

市販の安物のナイフは握りが手に馴染まず、気を抜いて振り回せば手から滑り落ちそうだ。

『――殺せ』
スピーカーからは機械的な命令。あの男の声。
もう一度手に握るナイフに視線を落とし、それから前方の敵になった少年に目を向ける。脅えた目には涙が浮かび、ガタガタと震えながらナイフの切っ先をこちらに向けている。
殺すのも、殺されるのも嫌というようだ。

何がそんなに恐ろしいのか？少年には理解できなかった。

――数十分後。

勝負は早くも決まっていた。どちらのものとも判別できない血痕が辺りに散っている。

荒く途切れがちの息がぜぇぜぇと聞こえる。

脇腹と腕が痛くて立っていられなかった。蹲るように体を丸めて脇腹を押えた。腕は刃が掠めただけだが、脇腹の方は比較的深く刺されてしまったようで指の間から血が染み出して止まる気配はない。

それでも、涙は出ずに息絶えた亡骸を見つめていた。

殺めた事に対する罪悪感はも何も無く、もしまたこの死体が立ち上がっても対処できるように気を抜けなかった。

そのうち、白衣に身を包んだ大人が少年の生死を確認し、遺体をどこかに運び去った。

カルテをもった白衣の女がゆっくり近づく。彼女が口を開く前にスピーカーから声が響いた。

『気分はどうだ？』

「…お腹と腕がすごく痛い…」

そう報告すると、スピーカーから笑い声が上がった。

腹を押さえる手は血に塗れ、ズキズキと痛みが押し寄せる。出血と痛みで意識が揺れる。

『私の目に狂いは無かったようだ！お前は使える！！』

「……？」

次第に意識が朦朧としだしたなか、少年はぼんやりとその言葉の意味を理解しようとした。

『お前は今日から正式に組織の暗殺者として生きてもらう』

急に口調が真剣なものに変わった。

その声が少年の運命を決定づける言葉を告げる。

『コードネーム“Ｋ”
お前の組織での名前だ』

Ｋｉｌｌｅｒ：殺人者

薄れゆく意識の中で、かろうじてと認識した。そしてすぐに意識は闇にのまれていった。

“Ｋ”と命名されたのは少年が推定５歳の時だった。

それからは本格的にいろいろな訓練を積んだ。
あの試験で動揺を見せたり、負けるようなら容赦なく捨てるつもりでいたらしく、これまではＫにそれほど手をかけたりはしていなかったようだ。

痛みに耐えるために鞭で打たれ、万が一捕えられ拷問にかけられても情報を漏らさぬような訓練も受けた。寝込みを襲われ重傷を負った経験から、安心して眠れなくなった。

女を知り、騙すことも覚えた。
腕の中に抱きながら刃を突き立てたこともある。驚きと絶望に目を見開き、そして光を無くしていく瞬間を何度も見た。
決して心を許して逆に溺れるなと耳にタコができるくらいに警告されたが、それも取り越し苦労だ。

傷が疼く夜があっても、心が痛むことはなかった…。

何度も致命傷になるような大怪我を負い、体には傷が増えていく。
血を吐き、苦しみのたうち回ったこともあった。

容赦なく襲う痛みに呻きと叫び声はあげても、助けを求めたことはない。
それがいかに無駄なことか、叶わないことかということは組織に引き取られるよりずっと前に身をもって覚えたことだ。

戻れない道を振り返る事は無意味と知り、命じられるままに“罪”と呼ばれるものに身を染めた。

命令に従い生きる事はとても楽だった。
人は考えるから悩み、余計な傷を増やす羽目になる。どうせ意思はあってないようなものだから、流れがあるならば流されてしまうほうがいい。

“罪”の重さも知らぬまま、少年は堕ちていく…。

この両手は人を殺す為にある。壊す為にある。
血に塗れた両手が見える。無残に事切れた体が無念そうに睨みあげている様子も簡単に浮かんでくる。
どこをどうすれば人間は死ぬか、死なぬ程度に痛めつけられるか、それも理解して身体が勝手に動く。

誰かを抱くとか、まして守るなんてことが許される腕は持ち合わせていない。必要がない。

そう、常々感じていた。
忘れたことなど、無かったのに…。

最期の時に君は

顔に冷たいものが落ちてきて、Kは力を振り絞り鉛のように重い瞼をこじ開ける。
少しの間夢を見ていた心地だ。
何度も思い出すことのある光景なのに、今はとても気分が悪い。
顔に落ちたのは当たり前に赤い液体かと思い、篠田たちは帰ったはずなのにアイラに何かあったのかと動揺しながら目を開く。
けれど、ぽたぽたと顔に降るソレは血生臭いものなんかじゃなくて…。

「ケイぃ…」

にじむ視界いっぱいにアイラの顔があった。いつも愛らしく笑っていた顔をくしゃくしゃにして涙に濡らしている。
血まみれで倒れたKに縋りついて震える声で名前を呼ぶ。
何ともない様子に安堵すると同時にまた目が閉じそうになったを必死に堪える。このまま目を瞑ってしまえば、そのまま目を開ける事は不可能になりそうだ。
彼女とは出会ってまだ数日だというのに、なぜかずっと前から一緒にいたような気がする。何も知らない、無垢としか言いようがない少女。
自分には似つかわしくないものばかりを持っていて、苛立ちすら覚

えたはずなのに今はもう安らぎすら運んでくる。
こういう穏やかさを感じるのも悪くないかもしれない。

アイラの腕に抱かれているシロクマは、今や純白を失い、赤く染まっている。大事なぬいぐるみが汚れるのも構わずに、アイラはKに寄り添った。
Kの黒い服に血は目立たないが、ぐっしょりと濡れていてアイラもそれで汚れる。赤い血に動揺しながらもアイラは助けを求めるようにKの名前を呟く。

記号として与えられた“K”という名も嫌いではなかったが、彼女が“ケイ”と呼んでくれる時に感じる心のざわめきは心地よい。

その間も涙は止まらずにKに落ちてその輪郭を滑り落ちる。溢れる血よりは冷たくて、でも心に深く染み込む。

手に入れる以前に、持っていたことすらない“涙”

“笑顔”

ただ見ていたかった。

ただそばに置きたかった。

ただ手に入れたかった。

ただ

守りたかった…。

それを過去に奪った命は許してくれなかった。
歩いてきた過去は自分が思うより血に塗れていて、冷たく暗いものだ。背負う十字架の重さに気づいてしまえばもう立ち上がることすらできなくなってしまう。

どうすればいいのか分らない。
償えばいいのか、それとも目を瞑ってこれまでと同じように生きればいいのか…。いや、同じように生きる事はもうできない。
非道な命令をする声さえももう聞こえてはこない。

ただ1つはっきりと分るのは自分の命の残量。

「笑え」と懇願する言葉も出せない。

アイラの顔だって、もうはっきりとは見えない。
すすり泣く声だけが耳朶を打ち、涙と小さな手の感触だけが触感のすべてを支配している。
彼女から貰ったものを何も返すことができなかった。すべてを奪い、危険に巻き込んだ代償を払うことができない。

教えてやれるのは、きっと…

俺の死を通して、人の“死”をアイラは知る。

両親の死を理解し、また泣くだろう。絶望に暮れてしまうかも知れ

ない。
俺の罪を知り、軽蔑し憎悪するだろうか？
異質だが平穏な幸せを壊すだけ壊して去っていく俺を憎むに違いない。

それでもまた
俺のために涙を流してくれるだろうか……。

笑顔を見たいはずなのに、泣いて欲しいとも願う。
我が儘な感情だ。アイラが、教えてくれた。

「ケイ、寝ないで…」

か細く不安げな声が耳に心地よい。
身体に触れる小さな手はKを軽く揺さぶる。その度に血が溢れ出るが、しかしその痛みさえもKは感じられなくなっていた。

けれどやはり最後に網膜に焼きつけるのは笑顔が良くて、だけどそれを伝えられないもどかしさがあった。
瞼を開けているのでやっとで、声なんか出せそうにない。

アイラは蒼白になったKの顔を見てさらに動揺を煽られ、混乱と不安は涙となって落ちるしかない。
無知すぎて、どう言葉をかければよいのか、Kに何をしてやればいいのか皆目見当もつかない。
Kは何か言いたげに口を動かすが、その度に漏れるのは苦しげな息と赤い血。必死で聞き取ろうとするが何も分らなかった。

「アイラちゃんといい子にするからっ…。お留守番もちゃんとする

し、ご飯も食べるから…」

ちゃんと起き上がって、いつも通りに戻って、と泣きながらお願いする。

その様子をうっすらと目を開きながら確認し、内心苦笑を洩らす。

涙に濡れる顔を最後に死ぬのは心残りだが、仕方ない…。

それがささやかな、ほんの一部の報いだと思えば。

一般的でない罪深い人生だった。

善悪なしに殺めてきた人々の屍を機械的に積み重ねてその上に生きてきた。それで良しとしていた。

呪詛のような恨み事や、常人なら耳を塞ぎたくなる様な断末魔を浴びせられてきた。

そんな自分の為に無垢で明るい笑顔を向けてくれる人がいる。穢れなき涙を、流してくれる人がいる。

なんて身に余る幸福か。

けれどもしも許されるのなら…。

アイラにはこの先も笑顔でいてほしい。たとえ俺がいま見る事ができなくても。

祈るように願うことしかできない。

張りつめていた力がすっと抜けていき、痛みに耐える為に強張っていた筋肉が弛む。

死神のようだと比喩された冷たい無表情さはもうどこにもない。そこにあるのは端正で血に塗れ蒼白ながらも美しく、そして年相応の若さのある少年の姿。

最後に浮かべた笑みは自嘲のつもりだった。泣き顔のアイラを映して、笑顔はやはり分不相応の高望みだったと。

けれどアイラはそれを見て、釣られる様に笑みを浮かべた。どうして笑ったのか意味は分らなかった。
ただこんな状況でもKが笑顔を浮かべていて、それを見たら自然と笑みが浮かんだ。

それはまるで天使のような。
地獄からの使者すら撥ねつけるような、優しく無垢で純粋な微笑み。
Kのために流された涙がきらきら光る。

けれど、Kがその笑顔を焼き付けることは永遠に無かった――。

xxxx

閑散としてもの寂しい部屋に、一人の少女が佇む。
数日前までは生活臭のまるでなかったが、シンクに置いてある食器はまだ洗浄されておらず汚れがこびり付いていて、子供服の入っていた袋だとかも無造作に床にある。
昼夜問わずカーテンのしまらない窓の下にはいつもと変わらずに機

械的な動きばかりを繰り返す人とモノが溢れかえる。
そのどれにも興味が沸かなかった。隣に問いかけて、不器用そうに、けれど律儀に返事をしてくれる相手はいない。

胸に抱かれているのはクマのぬいぐるみ。
茶色というよりは赤っぽいような毛並みは決して綺麗ではない。ごわついた毛を、優しく撫でるとパラパラと赤黒い粉が落ちた。

両親も、このぬいぐるみを与えてくれた人も亡くしてしまった。
この胸を支配する想いが何なのかは分からない。
ただひどく苦しくて、涙すら枯渇させてしまうほどにすべてを搾り取っていく。それは生きる気力さえも奪いかねない。
忘れていきていくのは到底不可能なくらい強烈な感情。

渇いた血でカサつく手を洗おうともせず、アイラは来たるべき客を待ちドアを見つめる。
表情が抜け落ち、茫洋とした瞳で宙を見つめる。幻覚のようにそこにはKが現れ、そして記憶の中で両親との生活が再生される。

もうあれから何日経ったのかも分らない。
泣いて1日が終わった日も、ただ茫然として1日が終わった日もあった気がする。そのどの時間も拷問のように緩慢に流れていく。

お父さまもお母さまもどうして死んでしまったの？ケイは、なんで殺してしまったの？
忙しくてなかなか一緒にはいてくれない2人だったけれど、愛してくれて、とても大好きだったのに。

ケイが最期にされたみたいな事を、ケイはお父さまとお母さまにしたの？

分らない。
だから、知りたい。

――ケイと同じ世界を。

FIN

あとがき。

えっと、あとがきまで読んで下さり有り難う御座いますm（＿＿）m
ＹＯＨＡＮＥです。

この作品を書き上げるまでに一か月弱ですかね…。完結して良かったです。飽きっぽいもので。

これを書こうと思ったきっかけは、ただ単に私がシリアスで、死に関わる話が大好きだったからです。
ラストはＫを殺してしまうか否か悩みましたが、逃げきるのもしっくりこなかったのであのような結末に落ち着きました。
ストーリーの流れとしてはありきたりで、展開予想がついてしまった方も多いと思います。ほんとに自己マン状態で衝動的に書き進めていった作品なんで、ご容赦ください。

反省としては、Ｋのアイラへの気持ちや執着を上手く書き切れなかったことです。
篠田の存在や位置づけについてもちゃんと書きこまれていないので、あまり移入できなかったかもしれません；
あと、語彙の無さには困りました（ー”ー；）

アイラ編（”Ａ”ｉｒａ）もあるのですが、ＵＰは反応をみてからにします．．．
ほとんど遊びで、Ｋの夢小説も書いてたりします（笑）

厳しいアトバイス待ってます！！（↑誹謗中傷に非ず）

感想や誤字脱字報告等々、掲示板の方にお気軽に書き込んで下さい。
雑談なんかでもいいんで★

では、
また会える事を祈りつつ……。

ＹＯＨＡＮＥ

（修正：２００８／０７／０５）
（完結：２００７／１２／０４）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7094e/

“Ｋ”iller

2010年10月10日13時29分発行